第１章　住友山田社宅の歴史的意義　―住友別子銅山から派生した新居浜の社宅―

１．はじめに

愛媛県新居浜市の住友山田社宅は、JR 新居浜駅の西方、約 2 キロメートルに位置する新居浜の住友各社の社宅群である（写真 1-1 参照）。その開発は昭和 4 年（1929）からはじまり、それは別子銅山（現、住友金属鉱山㈱）の鉱山町（以下、社宅街と称す）が[1]、第四通洞の出口の端出場（現、マイントピア別子）から川口新田・新居浜市街に広がった時期に当たる。

別子銅山の社宅街は、元禄 4 年（1691）に住友家が開坑したときは、その主要坑道沿いに広がっており、鉱脈が深くなるにつれ山腹から山麓へと下りていった。第一期は江戸時代の海抜 1200 メートルの「本鋪」に位置した歓喜・歓東坑時代、第二期は明治前期の海抜 1150 メートルの「東延」に位置した第一通洞時代、第三期は明治後期・大正期の海抜 750 メートルの「東平」に位置した第三通洞時代、第四期は昭和期の海抜 156 メートルの「端出場」に位置した第四通洞時代である。第四期は、戦前と戦後の二期に分かれる[2]。

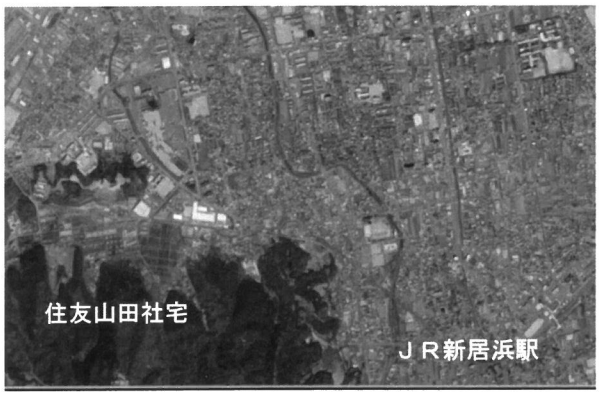

写真 1-1
星越地区周辺航空写真（平成 29 年）新居浜市所蔵

昭和 4 年、住友別子鉱山株式会社の住友山田社宅は別子鉱山鉄道が地方鉄道となったのを機に、最寄りの星越駅から建築が開始されたが[3]、奇しくも前年に大阪の住友合資会社（以下、住友本社）も、江戸時代から所有した山本新田 64 ヘクタール（現、大阪府八尾市）の宅地造成を、大阪電気軌道株式会社（現、近畿日本鉄道㈱）の山本駅周辺から開始した[4]。住友山田社宅と大阪の山本分譲地は中心街路に街路樹を植え、その左右に生け垣のある整然とした 100 坪から 200 坪の広い区割りをし、学校などを誘致した。その郊外住宅としての共通点は、住友本社が東京の田園都市株式会社の経営地（日吉台・洗足）、箱根土地株式会社の経営地（目白文化村・大泉学園・小平学園・国立）などを視察したことに由来するのではないかと考えられる[5]。

日本の鉄道会社による郊外住宅の先駆けは、明治末から大正期（1910 年代）の小林一三ひきいる有馬箕面電気軌道株式会社（阪急電鉄の前身）である。そのパンフレットに「美しき水の都は夢と消えて、空暗き煙の都に住む不幸なる我が大阪市民よ！」と呼びかけ、自然に囲まれ健康的な郊外住宅への移住を勧めた[6]。新居浜の住友山田社宅はあくまで社宅ではあるが、住友別子鉱山株式会社（住友金属鉱山㈱の前身）土木課の町田実（のち別子建設取締役）は、その開発の経緯を次のように述べている[7]。

> 新居浜における各社の事業発展に伴って、社宅は益々不足を生ずるとともに、原地、磯浦方面の社宅地帯は工場拡張の支障となり、かつ瓦斯や煤煙のため住宅地として不適当になってきた。そこで、当時の鷲尾所長は、まず山田方面に社宅の開拓を開始せられた。

すなわち、新居浜が工業都市として発展したことにより社宅が不足し、とくに惣開の工業地帯に隣接した原地・磯浦方面の社宅地帯が工場拡張の支障になり、またガスや煤煙のため住環境として不適当になったというのである。また、この計画を立案した鉱業所長の鷲尾勘解治は、「この山田の地は工場も近くて、しかも工場の空気から全く離れた環境の地だから、職員の住宅地としては、最適の地であると信じていたのであります。」と述べている[8]。まさに、住友山田社宅は小林一三のいう郊外住宅と同じ発想であった。

民間企業による社宅供給の原理は、福利厚生施設として最低限の投資による最低限の住宅供給が本来的なものであったが、住友山田社宅はこれに反し、郊外住宅の発想による良好な住環境と高水準の住宅

をめざしたものであった。そのため、平成20年（2008）ころまで約80年の長期にわたって住み続けられた。現在は老朽化により解体され、集合住宅への転換もおこなわれているが、今回その一部については、新居浜市と所有企業の協力により保存活用が図られることとなった。

本稿ではこれを機に、まず元禄4年の別子銅山の開発によって生まれた住友社宅の全体像を、その歴史と変遷を通して概観し、住友山田社宅が登場する背景を論じる。次いで、その住友山田社宅が郊外住宅として誕生した歴史的意義について明らかにするものである。

【注】

(1)社宅については、社宅研究会編『社宅街　企業が育んだ住宅地』（学芸出版社　2009年　以下、文献Aとする）が研究の初出である。本書は、社宅を労働争議・労働災害・公害問題等の「負の遺産」から解き放ち、「近代産業黎明期から、住宅ストックの乏しい地方において果たした役割は大きく、福利施設や都市基盤をともなった開発は当該地方の都市化を促した」歴史遺産と位置づけている。また、住友山田社宅については、砂本文彦「鷲尾勘解治と新居浜・住友山田団地について」（『日本建築学会計画系論文集』第519号　1999年）、同「住友山田団地／新居浜―鉱業から工場へ、山から浜への軌跡―」（片木篤ほか編『近代日本の郊外住宅地』鹿島出版会　1999年　以下、文献Bとする）所収が先行研究である。砂本は「住友山田団地」としているが、本報告では実態が社宅なので、「住友山田社宅」と呼称する。

(2)本節の引用は特に断らない限り、末岡照啓「別子銅山社宅の形成と変遷―別子の山から新居浜へ―」（『別子銅山が育んだ山田社宅　現況調査報告書』新居浜市企画部別子銅山遺産課　平成22年）所収、同「別子銅山社宅街の形成と変遷」（『別子銅山が育んだ社宅街―別子の山から新居浜へ―』新居浜市広瀬歴史記念館　平成22年）による。なお、砂本文彦の「住友別子銅山の社宅街の展開」（『近代日本における企業社宅街の成立と展開に関する研究―金属鉱山系企業社宅街の比較分析―』財団法人第一住宅建設協会　2008年）、同「新居浜／社宅街という生活文化の遺産」（文献A所収）は、別子銅山社宅街の先行研究であり、併せて参照してほしい。

(3)昭和34年「別子鉱業所社宅現況　総務部人事課」（別子銅山記念館所蔵）の社宅建築年次による。『鷲尾勘解治自伝』（益友会発行　昭和56年）265～275頁。

(4)昭和3年「処務報告書　文書係」（住友史料館所蔵）。『八尾市史』（昭和33年）356～359頁。

(5)「（住友合資会社地所課写真帳）」（住友史料館所蔵）。

(6)小林一三『逸翁自叙伝』（図書出版社　1990年）192～195。

(7)町田実「住友奉職三十五年を追想して（六）社宅の経営」（『別子建設月報』第69号　昭和29年）。

(8)注(3)の鷲尾前掲書に同じ。

2．別子銅山と住友社宅の変遷

（1）江戸期の社宅(歓喜・歓東坑時代　1691～1867)

別子銅山は元禄4年(1691)の開坑から住友家が一貫して経営してきた。そのため、海抜1200メートルの歓喜・歓東坑を中心に、勘場（鉱業所本部）・鋪方（採鉱部門）・吹方（製錬部門）・炭方（燃料部門）の施設が置かれ、別子山中に鉱山町が形成された。新居浜には、物資輸送の中継基地の立川中宿、物資搬出入基地の新居浜口屋が置かれた。別子銅山には山師家内と呼ばれる手代（職員）と稼人と呼ばれる労働者がおり、山師家内はほとんどが単身赴任で、100人前後が勘場など各施設に分散して住んでいた。一方、稼人は、稼人小屋と呼ばれる貸家に住んでおり、多いときで420軒、少ないときで316軒あり、平均すると350軒前後で推移した。家族を含めた稼人数は3000人から4000人おり、単純に平均すると1軒当たりの人数は10人ほどであった。

（2）明治前期の社宅(第一通洞時代　1868～1899)

第一通洞時代

明治9年(1876)、フランス人技師ルイ・ラロックの近代化プラン「別子鉱山目論見書」によって、採

鉱の近代化として、東延斜坑が海抜約 1150 メートルの坑口から開削された。同 13 年に新居浜まで牛車道が開通すると、海抜 1300 メートルの銅山越の難所を回避するため、同 19 年に東延斜坑直下に第一通洞が貫通した。これにより、別子銅山の社宅街は歓喜・歓東坑から第一通洞、さらに小足谷にまで広がった。明治 26 年には別子鉱山鉄道が開通し、別子銅山と新居浜はわずか 3 時間ほどで結ばれることになった。

社宅制度の廃止

旧別子には江戸時代以来の勘場（鉱業所本部）があり、見花谷・両見谷の稼人小屋（社宅）を中心に、明治 8 年(1875)に私立足谷小学校、同 16 年に住友病院が建てられた。ところが、明治 20 年代になると、社宅は旧別子から第一通洞を中心とした東延・小足谷地区へと広がった。明治 6 年当時、旧別子の世帯数は 281 戸、山内人口は 1431 人であったが、同 21 年には世帯数 628 戸、山内人口 3120 人へと急増し、同 29 年には 732 戸、3802 人に達した。小足谷には、採鉱課長や稼人の社宅、醸造場、接待館、劇場や私立小足谷小学校が新設され、それらは頑丈な石垣の上に築造され、煉瓦塀で囲まれていた。広瀬宰平は、稼人の自立意識を高めるため、明治 16 年には無料で貸与してきた稼人の社宅を、全廃する方針を打ち出したが、この時期は持ち家制度を推進していた時期である。

新居浜の発展と煙害問題

明治 12 年(1879)、新居浜の平野部では大型蒸気船が停泊できるよう、新居浜沖合の御代島に港を建設し、陸運と海運の一体化を図った。明治 21 年から、惣開と山根に洋式製錬所が完成し、惣開では水套炉や反射炉で銅製錬が、山根では銅製錬の残滓から硫酸などの化学薬品製造と製鉄製造試験が実施された。明治 23 年の別子開坑 200 年記念に建立された「惣開之記」碑に広瀬宰平は、「是地や南鉱山を負ひ、北海湾に臨み、最も舟車に便なり」と記した。明治 26 年には、その言葉どおり別子鉱山鉄道が開通し、別子への起点となる惣開駅が設けられ、新居浜は一農漁村から煙突の林立する臨海工業都市へと変貌しつつあった。

ところが、明治 26 年から 27 年にかけて亜硫酸ガスの煙害が激しくなり、周辺の田畑山林の作物に被害が続出したため、農民から抗議の声が上がった。明治 28 年 11 月、別子支配人伊庭貞剛は惣開製錬所の煙害問題を根絶するため、新居浜沖 20 キロの四阪島移転を決意した。四阪島は、愛媛県越智郡宮窪村（現、今治市宮窪町）に属し、美濃島・家ノ島・鼠島・明神島からなる水のでない無人島である。明治 30 年から移転工事が始まり、美濃島に事務所・社宅・学校・病院が、家ノ島に製錬所が建設された。

近代社宅制度の創設

明治 32 年(1899)8 月 28 日、愛媛・香川の両県に大水害をもたらした台風は、別子鉱山を直撃した。降水量 325 ミリ余のほとんどが集中豪雨となって降り注ぎ、山津波となって幾多の貴い人命と家屋・財産を暗闇の濁流に飲み込んだ。この山津波による死傷者は実に 538 人、そのうち 513 人の貴重な生命を奪い、別子開坑以来 200 年余にわたる諸設備に壊滅的な打撃を与えたのであった。明治 32 年 11 月 1 日付で採鉱課を除く、鉱業所本部と全施設が新居浜に移転された。これにより、旧別子では採鉱部門の施設・住宅の再建が急ピッチで進められ、新居浜では鉱業所本部と製錬所の関連施設、および社宅建設が大規模に始まった。それまでの職員住宅は、自ら貸家講を結成して営まれていた。

翌明治 33 年 2 月に至り、別子職員を対象に「別子鉱業所貸家貸付規則」が制定された（戦前の住友では、社宅のことを貸家と称していたので、原文にある場合はこの呼称を用いる）。当時の職制は高等(一～三等)・等内(一～十等)・等外(一～五等)などにわかれており、建坪は職位により、高等職員の支配人・設計部長が 100 坪以下、等内一等～三等職員が 70 坪以下、同四等～六等職員が 40 坪以下(ここまでが管理職)、同 7 等職員以下・補助員が 30 坪以下の戸建てとし、等外職員・工手・日給雇い等は 15 坪以下の長屋建てとされた。大正 2 年(1913)7 月には、労働者・請負人・飯場頭のための「労働者貸家規

程」が制定されたが、その１軒当たりの平均建坪は6～9坪であった。

明治33年３月、「貸家等級及坪数ノ件」が通達され、職制によって甲乙丙の貸家仕様が定められたが、実際の貸家は建坪に応じ、30坪以上が甲号貸家、20坪以上が乙号貸家、12坪以上が丙号貸家、12 坪以下が丁号貸家となっていた（以下、貸家を社宅と表記）。すなわち、6 等職員以上ないし 7 等～10 等職員が甲号・乙号社宅、等外職員以下が丙号・丁号社宅に該当していた（表 1-1 参照）。明治 33 年当初の家賃は、1 か月につき建築費・購入費の 7 朱(7%)であったが、翌 34 年に同業他社の家賃を調査したところ、八幡製鉄所の官舎や三菱合資会社の炭鉱・工業社宅、および生野鉱山・三池炭坑社宅は無償、足尾銅山・阿仁銅山・釜石鉄山社宅は 20 銭～3 銭の間、筑豊の安川炭鉱は貸家価格の 4～6 パーセントで、別子銅山が割高であることが判明した（表 1-2 参照）。また、現行の建築・購入価格の 7 パーセントでは、建築・購入時期によって評価にばらつきがあり、立地や建築構造の異動も家賃の不均衡となっていた。そこで、明治 34 年 6 月 21 日、家賃は建坪と敷坪に分けて徴収し、前者は甲乙丙丁の等級によって、1 か月 1 坪につきそれぞれ 12 銭・10 銭・8 銭・6 銭に分かち、後者はいずれも一律 5 厘に改訂された（前掲表 1-1 参照）。

表１－１　職員貸家の種類と家賃（明治33年３月22日）

種別	職員等級	建坪	家賃	家賃（1坪/月）	
			明治33年3月	明治34年6月改正	
				建坪	敷坪
甲号	等内六等以上	４０坪以下の一戸建て、門構え・玄関・浴室付き	1か月建築費・購入価格の7%	12銭	5厘
乙号	等内七等以下、十等迄	３０坪以下の２戸ないし４戸続きの一戸建て、浴室設けることもある		10銭	5厘
丙号	等外・工手・日給雇等	２０坪以下の長屋建て、浴室なし		8銭	5厘
丁号	同上	１１坪以下の同上		6銭	5厘

出典：明治34年「貸家例規　庶務課別子出張所」（住友史料館所蔵）

（３）明治後期・大正期の社宅(第三通洞時代　1900～1925)

東平の開発と第三通洞時代

表１－２　各社の社宅と家賃（明治34年現在、住友調べ）

製鉄所・鉱山	種別	建坪	家賃（1坪/月）	
官営八幡製鉄所	高等官舎	50坪以上	無し	定員内は無家賃
	判任官官舎	50坪以下	無し	同上
	職工官舎	15坪以下	無し	同上
三菱合資会社の炭坑・工業	一軒建て	25～100坪	無し	疊修繕を除く
	長屋建て	8～10坪	無し	
生野鉱山	甲	30～50坪	無し	
	乙	20～30坪	無し	
	丙	10～20坪	無し	
	丁	10坪以下	無し	
三井三池炭坑	職員	50～100坪	無し	
	職員	25～50坪	無し	
	職員	15～25坪	無し	
	職工・坑夫等	10～15坪	無し	
	補助以下		5銭	
筑豊安川炭坑	支配人・代理人		有償	貸家価格の6%
	その他		有償	貸家価格の4～5%
足尾銅山	甲	30～40坪	20銭	修繕は障子の張替のみ
	乙	20～30坪	16銭	
	丙	15～20坪	14銭	
	丁	12～15坪	10銭	
	戊	10～12坪	5銭	
阿仁鉱山	一等役宅	畳敷き	14銭	
		板敷き・土間	10銭	
	二等役宅	畳敷き	12銭	
		板敷き・土間	8銭	
	三等役宅	畳敷き	10銭	
		板敷き・土間	6銭	
	等外役宅	建坪	3銭	
釜石鉱山		畳敷き	6銭	畳敷き1枚3銭

出典：明治34年「貸家例規　庶務課別子出張所」（住友史料館所蔵）

明治 35 年(1902) 8 月、海抜 750 メートルに位置する東平に第三通洞が貫通し、東平地区の開発が始まった。実は、第三通洞の開削と東平の開発は、四阪島製錬所の建設と連動しており、別子山中と新居浜臨海部での焼鉱と製錬を根絶するため、東平に貯鉱庫と選鉱場を建設し、すべての製錬工程を四阪島製錬所で行う予定であった。そのため、新居浜の鉱業所本部を中心に、採鉱の東平、製錬の四阪島地区に分かれて社宅・学校・病院・郵便局など生活関連施設がしだいに整備されていった。明治 38 年 1 月、四阪島製錬所が本格操業すると、輸送力増強のため第三通洞に坑内電車が走り、東平～黒石間に複式索道が敷設され、索道の黒石停車場（海抜約 150m）には下部鉄道の黒石駅が新設された。そのため、明治 44 年には上部鉄道と石ヶ山丈～端出場間の索道は廃止され、東平索道と下部鉄道が鉱山の主要運搬路となった。

東平地区の社宅

明治 39 年(1906)8 月、東平選鉱場が完成すると、採鉱・選鉱部門の人員が増加し、表 1-3 によ

表1-3　別子鉱山の貸家変遷

種別	地区	明治39年（1906）			明治44年（1911）			大正７年（1918）			大正13年（1924）			昭和元年（1925）		
		軒数	建坪	１軒	軒数	建坪	１軒	軒数	建坪	１軒	軒数	建坪	１軒	軒数	建坪	１軒
		軒	坪	坪	軒	坪	坪	軒	坪	坪	軒	坪	坪	軒	坪	坪
傭員（職員）	別子	141	1,472	10	141	1,915	14	0			0			0		
	東平	85	1,074	13	132	1,584	12	160	1,955	12	158	2,190	14	156	2,176	14
	端出場	0			0			50	821	16	59	1,018	17	63	1,089	17
	新居浜	206	3,578	17	223	4,073	18	214	4,116	19	239	4,730	20	253	4,995	20
	四阪島	116	1,629	14	188	2,739	15	176	2,601	15	125	2,063	17	125	2,062	16
	その他	17	239	14	47	668	14	46	685	15	27	642	24	21	335	16
	合計	565	7,992	14	731	10,979	15	646	10,178	16	608	10,643	18	618	10,657	17
		人			人			人			人			人		
	人数	707			777			830			725			759		
		軒	坪	坪	軒	坪	坪	軒	坪	坪	軒	坪	坪	軒	坪	坪
稼人（労働者）	別子	192	1,655	9	252	2,247	9	0			0			0		
	東平	122	762	6	618	3,861	6	641	3,814	6	747	4,502	6	779	4,744	6
	端出場				0			326	2,704	8	502	4,280	9	557	4,796	9
	新居浜	11	205	19	34	303	9	27	201	7	27	201	7	31	230	7
	四阪島	425	2,945	7	998	5,682	6	1,152	6,375	6	990	5,628	6	1,004	5,851	6
	その他	6	59	10	121	1,122	9	190	1,374	7	71	1,016	14	69	546	8
	合計	756	5,626	7	2,023	13,215	7	2,336	14,468	6	2,337	15,627	7	2,440	16,167	7
		人			人			人			人			人		
	人数	5,728			5,386			5,147			4,576			5,054		
		6,435			6,163			5,977			5,301			5,813		

註：１軒当たりの建坪は、軒数で割った平均値である。
出典：「住友別子鉱業所一覧」『別子銅山』（住友史料館所蔵の事業案内）

ると 85 軒の職員社宅と 122 軒の労働者社宅があった。翌明治 40 年 4 月には東平尋常高等学校が開校し、同 44 年に第三通洞の延長として日浦通洞が連絡すると、旧別子から連絡が良くなり、職員社宅は 132 軒、労働者社宅は 618 軒と大幅に増加した。大正 5 年(1916)1 月、採鉱本部は旧別子の東延から東平に移転し、同年からつぎつぎと諸設備が整備された。そのため、社宅数は大正 7 年に職員 160 軒、労働者 641 軒であったが、昭和元年(1926) には職員 156 軒、労働者 779 軒となった。大正末の人口は約 5000 人で、社宅は 900 軒を超えていたのである。大正 14 年の「東平地形図」（図 1-1 参照）によると、第三通洞の出口には、採鉱課と煉瓦造の第三変電所があり、この変電所を通じて落シ水力発電所の電気を坑内電車に流した。また、「第三」地区を辷坂（すべりざか）トンネルでぬけると東平の中心部となり、機械課・選鉱場・貯鉱庫・インクライン・索道停車場があった。その西側一帯に社宅群と学校・病院・娯楽場・接待館があった。東平は人口増加につれ、社宅群が東側山腹の一本松・柳谷・唐谷、その下方の足谷川沿いの辷坂、西の尾根を越えた呉木、南東の尾根を越えた喜三谷へと広がっていたことがわかる。

端出場地区の社宅

明治 35 年(1902)5 月、下部鉄道の終点の端出場に火力発電所が建設された。 端出場は鉄道の運搬拠点と同時に、坑内電車や索道のエネルギー源として、明治 37 年にはその上流に落シ水力発電所（90kW）が、同 45 年には端出場水力発電所（3000kW）が完成した。ところが、大正 4 年(1916)9 月には端出場水力発電所の南側に第四通洞が貫通し、併せてその坑内で第三通洞と連絡する大立坑が完成したので、端出場に別子全山の鉱石が集められるようになった。大正 8 年には、第四通洞の出口に仮手選鉱場が設置され、第四通洞の南側山手に打除社宅、西側山手に鹿森社宅が設けられた。そのため社宅数は、大正 7 年に職員 50 軒、労働者 326 軒であったが、昭和元年(1926)には職員 63 軒、労働者 557 軒へと増加し、社宅数が 600 軒を超え、東平に次ぐ社宅街へと発展していたのである（図 1-2、前掲表 1-3 参照）。

新居浜地区の社宅

明治 32 年(1899)11 月、別子鉱業所本部が新居浜惣開の旧分店に移転すると、翌 33 年 1 月別子鉱業所の西側湿田を埋め立てて惣開尋常小学校が開校した。明治 34 年 3 月には別子鉱業所の東隣に住友銀行新居浜支店（現、住友化学愛媛工場歴史資料館）が新築落成し、12 月には道路をはさんで南側に住友病院が開院した。こうして新居浜の社宅群は、まず別子鉱業所の惣開駅から延びた下部鉄道沿いの湿田を埋め立てて造成された。明治 38 年 1 月、四阪島製錬所の操業開始にともない、製錬関係の職員・労働者とも四阪島へ転勤したが、惣開には別子鉱業所本部のほか、設計部など 9 課の職員と労働者が残った。明治 39 年と 44 年の職員社宅は前掲表 1-3 によると、それぞれ 206 軒と 223 軒、労働者社宅は 11

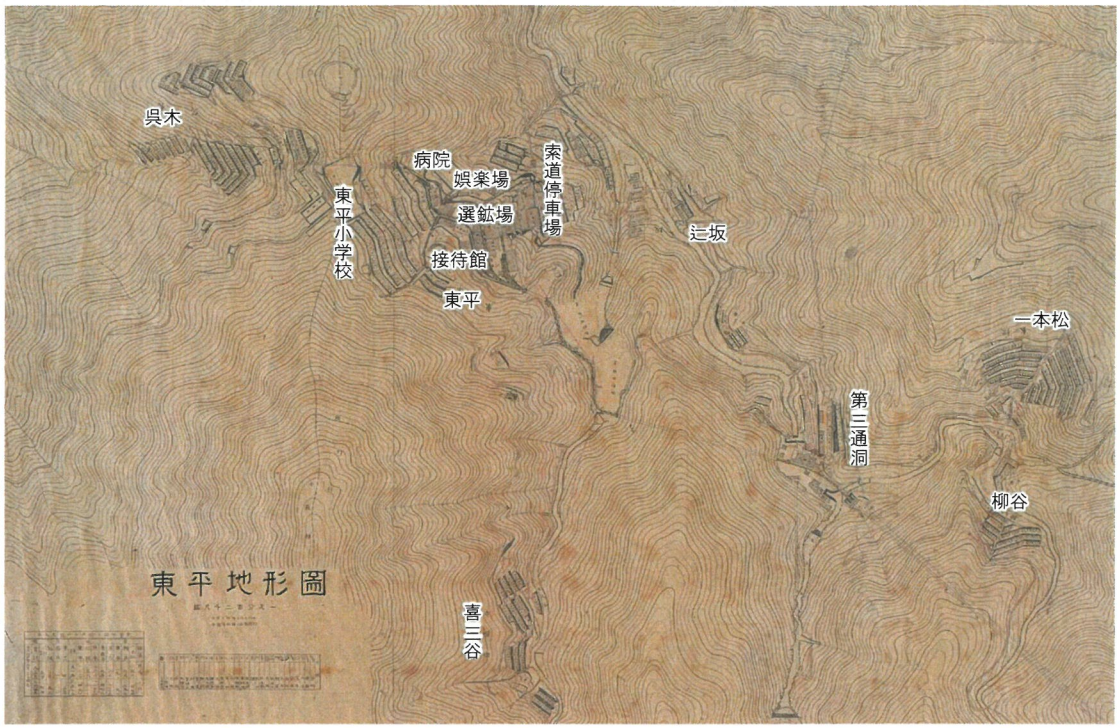

図 1-1　東平地形図　（大正 14 年）　別子銅山記念館所蔵

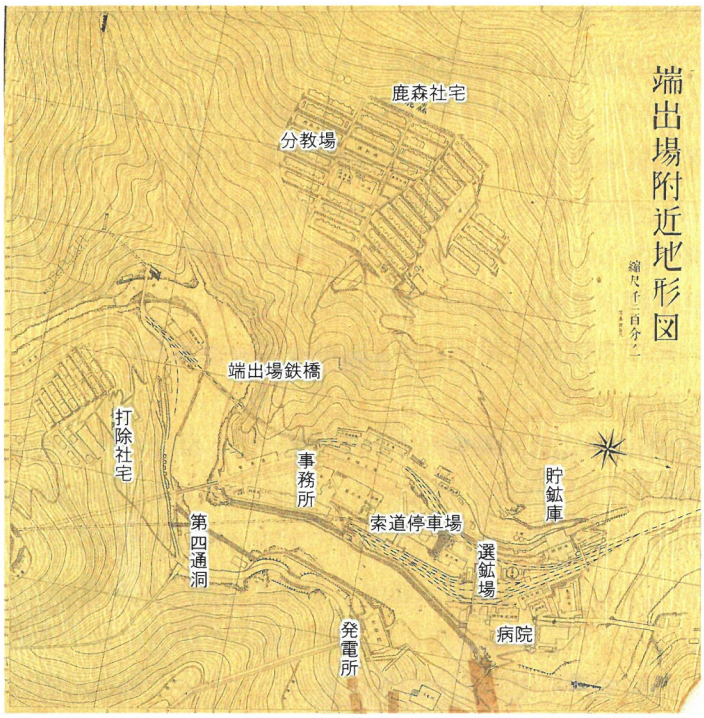

図 1-2　端出場地形図　（昭和 34 年）
別子銅山記念館所蔵

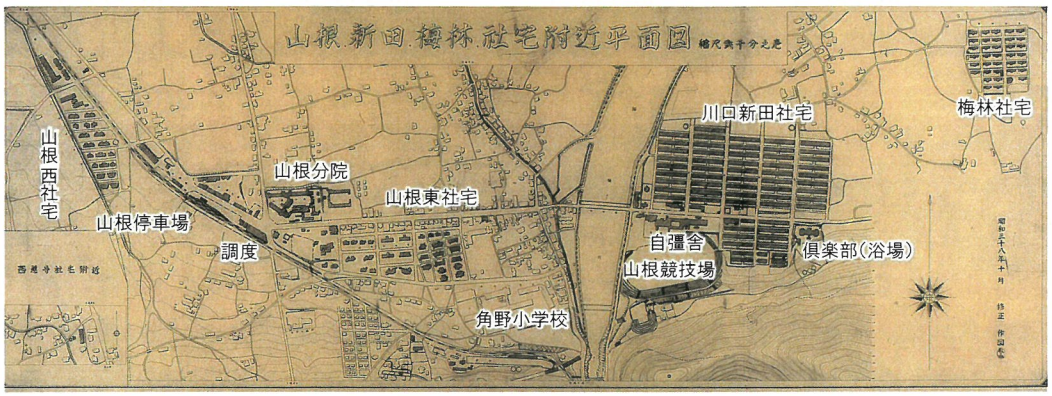

図 1-3　山根・梅林・社宅附近平面図　（昭和 38 年）別子銅山記念館所蔵

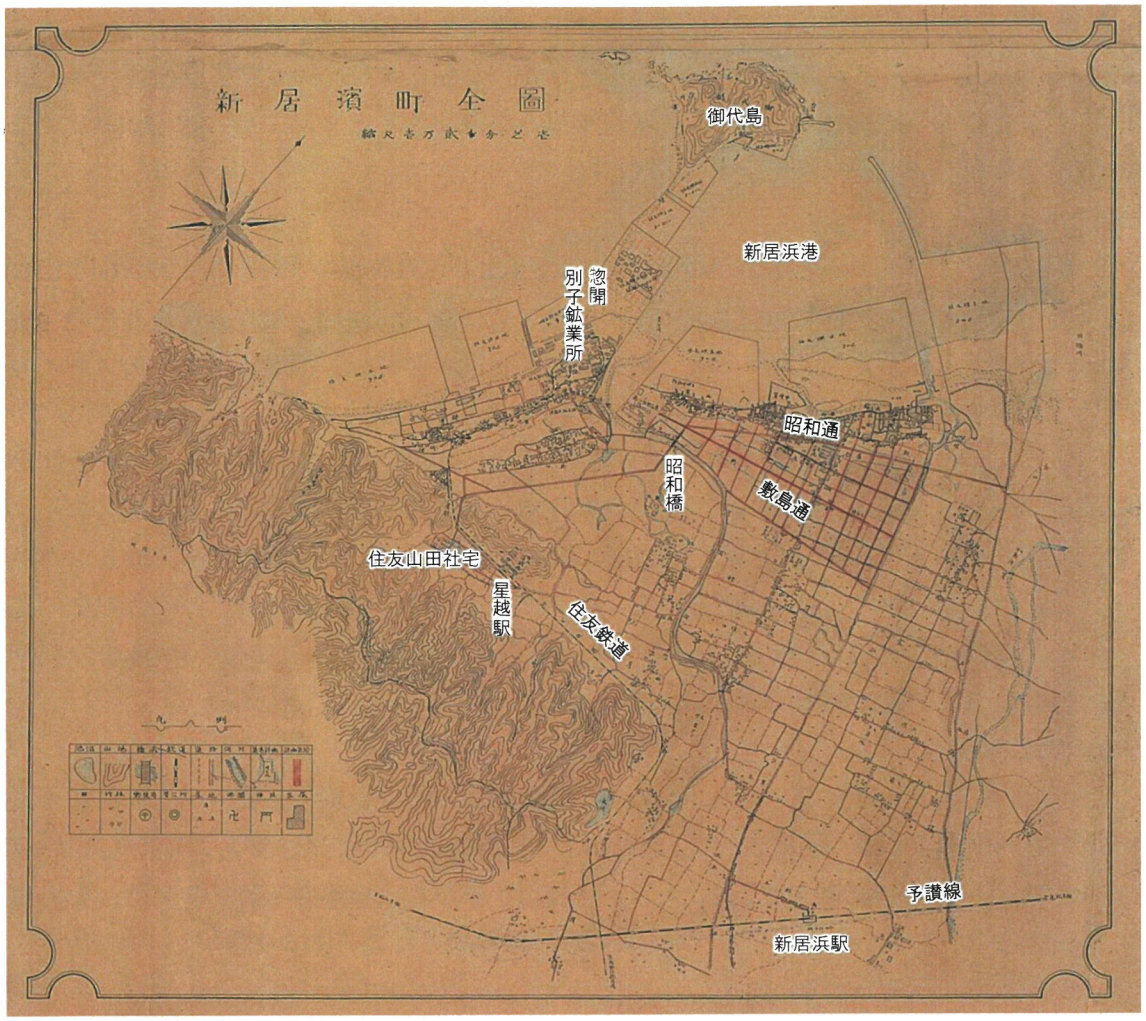

図 1-4　新居浜町全図〔都市計画図〕（昭和 7 年）新居浜市所蔵

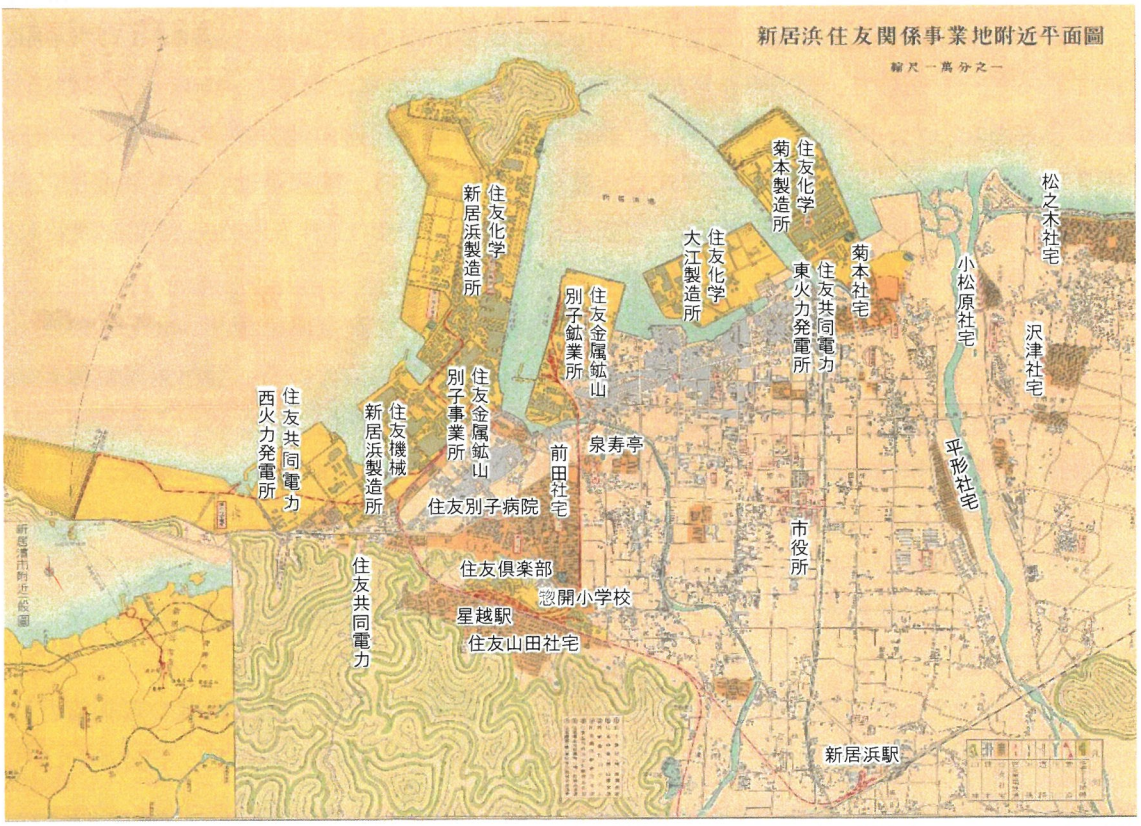

図 1-5　新居浜住友関係事業地附近平面図　（昭和 35 年）新居浜市所蔵

軒と 34 軒であり、明治後期(1900 年代)は別子事業所へ勤務する職員社宅が圧倒的に多かった。ところが、大正 2 年(1913)に住友肥料製造所（現、住友化学㈱）が設立され、同 4 年に機械課（現、住友重機械工業㈱）も鑿岩機・発電機などを製作し、各種事業が活発化すると、同 7 年には職員社宅が 214 軒、労働者社宅が 201 軒と、労働者社宅は 6 倍に急増した。

四阪島地区の社宅

明治 38 年(1905)1 月から四阪島製錬所が操業を開始したが、その頃の「四阪島製錬所配置図」によって、日暮(ひぐらし)別邸をランドマークとして見ると、その東側に吉備浦・吉備峠・明見谷・北浦社宅・糯ヶ岡・東巽・巽の社宅群があり、その西側に日暮・西日暮・銅ヶ関・勝浦が、南側に頂上・美ノ浦・美ノ上・美ノ端の社宅群があった。いずれも明治 31 年から 42 年までに建築されたものである。明治 39 年当時に前掲表 1-3 によると、職員社宅が 116 軒、労働者社宅が 425 軒であったが、44 年にはそれぞれ 188 軒と 998 軒となり、労働者社宅が倍増した。大正 10 年(1921)に四阪島製錬所の大改造があり、陸揚げ施設や製錬設備が新設され、その動力源として端出場水力発電所の電気を新居浜から 20 キロの海底ケーブルで引き込んだ。大正 13 年には四阪島のシンボルである大煙突も完成した。この合理化により社宅数は、大正 7 年に職員 176 軒、労働者 1152 軒であったものが、それぞれ 150 軒、1004 軒に減少した。

（4）昭和戦前期の社宅(第四通洞時代Ⅰ　1926～1945)

端出場と第四通洞時代

大正 4 年（1915）9 月、海抜 156 メートルの端出場に第四通洞が貫通し、坑内の鉱石は第三通洞と第四通洞の両方から搬出されるようになった。前掲図 1-2 にあるように第四通洞が主要坑道となったので、従来の打除(うちよけ)・鹿森の労働者社宅では手狭になり、大正 12 年から山根製錬所跡の北側に、大規模な川口新田社宅が造成され、昭和 3 年（1928）までに 480 戸が建設された（図 1-3 参照）。昭和 6 年には住友別子病院の山根分院が設置された。

大正 14 年 6 月、星越に新居浜選鉱場が完成すると、選鉱場に隣接して、星越駅と引き込み線が設置された。同駅構内には、惣開と同様の機関車修理工場、操車場が設けられ、惣開に匹敵する鉄道拠点となった。また、選鉱場から出る尾鉱（廃鉱）で隣接の湿地帯が埋め立てられ、後述する住友山田社宅が形成されていった。こうして、端出場と星越が採鉱・選鉱の一大拠点になると、両所を結ぶ鉄道の人員・物資輸送が急務となった。昭和 3 年 8 月 6 日、鉄道省に鉱山専用鉄道の地方鉄道切り替えを申請し、翌 4 年 2 月 6 日許可された。住友別子鉱山株式会社鉄道の発足である。同鉄道は、地方鉄道法に則して車両を増強し、土橋駅と山根駅を北側に移転して安全面を整え、同年 11 月 5 日から営業を開始した。

工都新居浜の誕生

昭和 2 年(1927）10 月、別子鉱業所は別子鉱山株式会社（現、住友金属鉱山㈱）として住友本社から分離独立した。このときトップになったのが常務取締役の鷲尾勘解治である。翌年鷲尾は鉱量調査を実施し、鉱脈が衰えその余命が短いことを知ると、これに代わる事業を起こすため、①新居浜築港と埋立による工場誘致、②昭和通を初めとする道路整備、③山田・川口新田など社宅群の建設、④別子銅山専用鉄道を地方鉄道として一般乗客に解放するなど、新居浜の都市計画を断行した（図 1-4 参照）。これには、町長白石誉二郎の賛同もあり、埋立地には、別子銅山から派生した住友系の工場群の建設を目的としていた。鷲尾はすでに述べたように、社員の福利厚生のための社宅建設も推進した。

新居浜と社宅の発展

昭和6年（1931）2月、田島房太郎は鷲尾の後任として新居浜に赴任し、昭和恐慌の緊縮策として都市計画を一時中断した。すると、会社と地域社会の間で軋轢が生じ、翌昭和7年2月、三村起一はこれを収拾するため新居浜に赴任し、田島の後任の龍野昌之を補佐した[1]。三村は住友伸銅場に勤務していたとき、アメリカのフォード自動車で労務管理を学んだエキスパートであり、赴任すると①新鉱脈の探鉱、

②煙害問題の解決、③工都新居浜の建設という目的を掲げ、昭和9年7月には龍野の後任の専務取締役となった。三村の働きによって、昭和8年新居浜築港が開始されると、翌9年その造成地に別子銅山から派生した住友化学工業㈱、昭和9年に㈱住友肥料製造所を改称)、四国中央電力㈱、昭和9年に土佐吉野川水力電気㈱を改称、現、住友共同電力㈱)、住友アルミニウム製錬㈱（昭和9年設立)、住友機械製作㈱、昭和9年設立　現、住友重機械工業㈱）が誘致された（図1-5参照)。いずれも昭和9年に設立や改称されたもので、住友では鉱山を含めて「新居浜5社」と称されるようになった。翌昭和10年10月、新居浜5社では、別子住友病院（現、住友別子病院)、新居浜住友倶楽部（のち別子住友倶楽部と改称、現、住友金属鉱山㈱「星越館」)、職員社宅・合宿所などの建築やその共同管理について協議することを定めた(2)。これにより、山田社宅・別子住友病院・住友倶楽部などが藤木工務店の施工で着工されることになった（第3節参照)。

昭和 11 年 3 月には新居浜電錬工場が建設され、銅製錬の過程で金銀が採取された。同年 9 月には、星越から分岐して新居浜港に至る全長 2 キロメートルの、新居浜港線が開通し、金子川（現、東川）にかかる昭和橋の南詰に昭和橋駅が設置された。新居浜の中心地に鉄道が乗り入れられ、昭和通が商店街として発展する契機となった。一方、星越地区は、住友山田社宅の開発により戸数が増加したので、昭和 8 年と 11 年に惣開から惣開小学校と別子住友病院が新築移転し、同 11 年には新居浜住友倶楽部が新設されるなど、文化施設の集中が図られた。また、延伸した鉱山鉄道の昭和橋駅前には、宿泊施設の泉寿亭が新築され、別子鉱山を訪れる関係者でにぎわった。昭和 14 年には、町と企業が協力して武徳殿（現、国登録有形文化財）を建設し、青少年の武道教育に貢献した。

昭和 12 年 11 月 3 日、新居浜では市制が施行され、初代市長の白石譽二郎はいっそう市と企業の共存共栄を目指した。昭和 14 年には、念願の新居浜港が完成し、四阪島の煙害問題も解決したなかで、翌 15 年別子開坑二百五十年祭が開催された。昭和 17 年 11 月には、星越駅から省線新居浜駅（現、JR 新居浜駅）に至る全長 2.7 キロの新居浜駅連絡線が開通し、新居浜は通勤客でにぎわった。

鉱山会社の設立と社宅規程の制定

昭和 2 年(1927)10 月、住友別子鉱山株式会社の設立に当たり、「職員貸家規程」（「別子鉱山諸規則」所収）が従来の「別子鉱業所貸家貸付規則」に代えて新たな社宅規則として制定された。第二条の職位による建坪規程によると、職制の変化にともない次のようになった。なお、住友では本社と連系各社の社長はすべて住友吉左衛門としていたが、途中から本社の総理事が会長を兼務して社長は空席とした。そのため各社の実質的トップは専務ないし常務であったが、昭和 16 年に軍の命令で社長制を敷いた。よって、以下の連系会社の専務ないし常務は実質のトップである。

①常務取締役が 100 坪以下

②取締役・支配人・副支配人・技師長・一等職員(旧一～三等)が 70 坪以下

③二等職員(旧四～六等)が 50 坪以下

④三等職員(旧七～九等、四等は旧九・十等)以下が 30 坪以下

表１－4　山田社宅の戸数と坪数

建設年	西暦	戸数			合計	内訳（戸）				建坪（1戸当たり）			平均（坪）
貸家等級		1級（特・甲号）	2等（乙号）	3等（丙号）		洋間付き	浴室付き	2戸1棟	2階建て	1級（特・甲号）	2等（乙号）	3等（丙号）	
昭和４年	1929	13	0	0	13	2	7	6		35.1	0.0	0.0	35.1
５年	1930	11	5	11	27	3	25	11	2	44.9	22.1	21.2	31.0
６年	1931	3	8	0	11		11	8		34.1	21.8	0.0	25.1
７年	1932	0	0	1	1					0.0	0.0	15.8	15.8
８年	1933	0	0	0	0					0.0	0.0	0.0	0.0
９年	1934	1	4	0	5		5	4		35.0	22.6	0.0	25.1
10年	1935	0	0	0	0					0.0	0.0	0.0	0.0
11年	1936	10	4	0	14		14			31.4	24.5	0.0	29.4
12年	1937	2	0	0	2	1	3			51.6	0.0	0.0	51.6
13年	1938	10	0	0	10		9			38.5	0.0	0.0	38.5
14年	1939	2	0	0	2		2			24.3	0.0	0.0	24.3
15年	1940	10	0	0	10		10			28.0	0.0	0.0	28.0
16年	1941	2	0	0	2		2			44.8	0.0	0.0	44.8
17年	1942	0	0	0	0					0.0	0.0	0.0	0.0
18年	1943	0	0	0	0					0.0	0.0	0.0	0.0
19年	1944	0	0	0	0					0.0	0.0	0.0	0.0
20年	1945	0	0	0	0					0.0	0.0	0.0	0.0
21年	1946	0	0	0	0					0.0	0.0	0.0	0.0
22年	1947	0	0	0	0					0.0	0.0	0.0	0.0
23年	1948	1	0	0	1	1	1			55.5	0.0	0.0	55.5
24年	1949	0	2	0	2					0.0	18.2	0.0	18.2
合計		65	23	12	100	7	89	29	2	36.4	20.4	16.6	31.2

註：住友別子鉱山㈱の分、他社分は不明。貸家等級は、（　）が戦前の等級。
出典：昭和34年「別子鉱業所社宅現況」（別子銅山記念館所蔵）

⑤補助職員(旧等外・坑夫頭)・準職員(給仕・使丁)が 15 坪以下

住友の職制は、高等(重役)・一等～四等・補助職員とその階層区分が緩やかになり、鉱山の実質トップの常務取締役(本社重役相当)は 100 坪以下の建坪が許された。例外もあるが、取締役以下は一等職員に相当し 70 坪以下、二等職員は 50 坪以下、三等職員以下 30 坪以下、補助職員は 15 坪以下となった。

社宅規程の改定

昭和 10 年(1935)7 月には、「職員貸家規程」全 19 か条が改定された。昭和 2 年 10 月の社宅規程と比較すると、第 2 条の入居資格、第 12 条の社宅種別と等級が改正された。その特徴は次のようにまとめられる。

①重役・一等職員および準ずる者が 45 坪以上

②二等職員が 25～50 坪

③三等・四等職員が 15～30 坪

④補助職員・準職員が 20 坪未満

昭和 2 年に比べて、階級が一つ少なくなり、建坪の階級差が 15～100 坪から 15～45 坪以上と縮まり、その区分も厳密ではなく重複している。これにより、幹部職員の住環境に融通性を持たせ、ある程度平準化しようとしたことが窺える。住友山田社宅の等級別戸数と平均建坪を**前掲表 1-4** でみると、一等職員が 65 戸の 36.4 坪、二等職員が 23 戸の 20.4 坪、三等職員が 12 戸の 16.6 坪であった。住友山田社宅は一等・二等職員の幹部社宅と位置づけられたのである。

また、昭和 2 年の規程では、入居後の畳・襖の張り替えは自己負担、建家の模様替えは制限を加え、庭木類も自己負担など厳しい方針のため、社宅が荒廃する事態が生じた。昭和 10 年 1 月、社宅が長く保存され、良環境が維持できるように、原則 3 年以上居住した社宅が空き家となった場合や同一居住者が 5 年以上居住した場合などは、社費による畳・襖等の更新を行うこととした。また、自費による社宅の加工・模様替えは家族が多く現状が手狭であることなどを条件に許可した。

昭和 12 年 6 月 21 日、住友別子鉱山㈱と住友炭礦㈱が合併して住友鉱業㈱が設立された。昭和 16 年 8 月、同社は「職員貸家規程」を改定すると、社宅の種別・建坪・家賃が次のように細分化された。表 1-5 にあるように、社宅は日本家屋と洋式家屋に大きく区分され、おのおの新居浜・角野・山根地区と、その他に分かれていた。実際の建坪は、特号が 45 坪 1 合以上、甲号が 30 坪 1 合～45 坪、乙号が 20 坪

表1-5　貸家の種別と家賃（昭和16年8月1日）

建築様式	所在	種別	建坪(2階建延坪)	家賃（1坪/月）		洋式応接室加算(1室/月)		
				築10年以下	築11年以上	築5年以下	築6～10年	築11年以上
日本家屋	新居浜・角野・山根	特号貸家	45坪1合(55坪1合)以上	50銭	45銭	5円	3円50銭	2円50銭
		甲号貸家	30坪1合～45坪(36坪1合～55坪)	45銭	40銭	3円50銭	2円50銭	2円50銭
		乙号貸家	20坪1合～30坪(24坪1合～36坪)	35銭	30銭			
		丙号貸家	15坪1合～20坪(18坪1合～24坪)	25銭	20銭			
		丁号貸家	15坪(18坪)以下	15銭	10銭			
	その他	特号貸家	45坪1合(55坪1合)以上	45銭	40銭	5円	3円50銭	2円50銭
		甲号貸家	30坪1合～45坪(36坪1合～55坪)	35銭	30銭	3円50銭	2円50銭	2円50銭
		乙号貸家	20坪1合～30坪(24坪1合～36坪)	25銭	20銭			
		丙号貸家	15坪1合～20坪(18坪1合～24坪)	20銭	15銭			
		丁号貸家	15坪(18坪)以下	15銭	10銭			
洋式家屋	新居浜・角野・山根	特号貸家	45坪1合(55坪1合)以上	65銭	55銭	5円	3円50銭	2円50銭
		甲号貸家	30坪1合～45坪(36坪1合～55坪)	55銭	45銭	3円50銭	2円50銭	2円50銭
		乙号貸家	20坪1合～30坪(24坪1合～36坪)	45銭	35銭			
		丙号貸家	15坪1合～20坪(18坪1合～24坪)	45銭	35銭			
		丁号貸家	15坪(18坪)以下	45銭	35銭			
	その他	特号貸家	45坪1合(55坪1合)以上	60銭	50銭	5円	3円50銭	2円50銭
		甲号貸家	30坪1合～45坪(36坪1合～55坪)	50銭	40銭	3円50銭	2円50銭	2円50銭
		乙号貸家	20坪1合～30坪(24坪1合～36坪)	40銭	30銭			
		丙号貸家	15坪1合～20坪(18坪1合～24坪)	40銭	30銭			
		丁号貸家	15坪(18坪)以下	40銭	30銭			

註：二階建て部分の家賃は、一階部分の半額。
出典：昭和16年「職員貸家規程（明治32～昭和20年「別子鉱山諸規則」所収）（住友史料館所蔵）

1合～30坪、丙合が15坪1合～20坪、丁号が15坪以下となっており、特号の家賃は月額40銭～65銭、甲号は30銭～55銭、乙号は20～45銭、丙号は15～45銭、丁号は10銭～45銭の幅があった。それぞれ二階建て部分の家賃は、一階部分の半額であった。また、特号・甲号で洋室の応接間があるものは、1室につき築年数を加味して、前者が2円50銭から5円、後者が2円50銭から3円50銭を加算された。月額の家賃に比べてかなり高額であり、贅沢な空間であった。昭和16年の改定は、職員の多様性に配慮したものであり、社宅とはいえかなりバラエティーに富んでいたと言える。なお、昭和10年10月の新居浜5社の共通事項協議により、各社の社宅規則も鉱山に準じていた。

（5）昭和戦後期の社宅(第四通洞時代Ⅱ　1945～1973)

住友本社の解散

昭和21年(1946)、財閥解体により㈱住友本社が解散されると、傘下の住友各社は独立することになった。その際、新居浜に事業所を有する各社のうち住友共同電力㈱を除いて、住友鉱業㈱は井華鉱業㈱、住友化学工業㈱は日新化学㈱、住友機械工業㈱は四国機械工業㈱と改称した。昭和25年3月1日に井華鉱業㈱は、事業部門の中から別子鉱業㈱、別子建設㈱（昭和37年住友建設に改称、現三井住友建設㈱）、㈱別子百貨店（昭和26年㈱別子大丸、昭和50年㈱新居浜大丸に改称、平成13年閉店）を分離したが、同27年にサンフランシスコ平和条約で占領政策が解けると、それぞれ別子鉱業は住友金属鉱山㈱、日新化学工業は住友化学工業㈱（現、住友化学㈱）、四国機械工業は住友機械工業㈱（現、住友重機械工業㈱）と元の名前に復帰した[3]。また、新居浜には明治30年（1897）から住友銀行（現、㈱三井住友銀行）新居浜支店があり[4]、戦後の経済発展によって昭和21年に大阪住友海上火災保険㈱（現、三井住友海上火災保険㈱）、同36年に住友生命保険(相)の新居浜支店がそれぞれ開設された[5]。昭和30年には四国林業㈱と東邦農林㈱が合併して住友林業㈱となり、新居浜に四国支店が置かれた[6]。

戦後復興と新居浜の社宅

戦後の新居浜の発展は、昭和23年（1948）1月に新居浜港が国際貿易港に指定されたことに始まる。昭和28年港湾法によって新居浜港務局が置かれ、同33年には住友化学の大江工場でわが国初の石油化学コンビナートの火が灯った。鉱山町から工業都市へと変貌しつつあった。昭和26年、㈱別子百貨店が㈱大丸と提携し㈱別子大丸（㈱新居浜大丸）ができた。当時デパートは通勤サラリーマンのあこがれであったが、新居浜のサラリーマンは休日、大丸で買い物し昭和通りを歩いて楽しんだ。そういう都会らしい楽しみ方が始まったときでもあった。昭和29年、バス路線が新居浜市内から端出場まで延びると、別子鉄道の乗客は激減するに至った。ついに、翌昭和30年1月、別子鉄道は地方鉄道から再び鉱山専用鉄道に戻った。新居浜

表1-6　住友金属鉱山の社宅（昭和34年調）

区域	社宅名	戸数	内訳（人）					建築年代
			1級	2級	3級	4級	其他	
東平		430	6	3	24	397		不明
端出場	山根	82	16	33	33			明治40・昭和4～16年
	西連寺	6				6		昭和２年
	立川	14		2	9	3		明治44～昭和21年
	打除	33		3	30			大正７年
	鹿森	281			4	275	2	大正８・14年
	新田	563	1	2		560		大正12～昭和3・15年
	梅林	70			70			昭和24年
	小計	1,049	17	40	146	844	2	
新居浜	山田	100	65	23	12			昭和4～24年
	前田	130	32	81	5	11	1	昭和11～34年
	北泉	20			20			昭和25年
	河内	31			19	12		昭和25・26・32年
	磯浦	36			26	10		昭和29～34年
	庄内	12			12			昭和19年
	揚地	48			19	29		明治41～昭和33年
	原地	28				28		昭和30・31年
	沢津	100			35	65		昭和18年
	平形	86			21	65		昭和16年
	山根	29				29		昭和27年
	雑	45			9	35	1	大正8～昭和27年
	山田ﾃﾊﾟｰﾄ	36			36			昭和27・28年
	小計	701	97	104	214	284	2	
四阪島	日暮	25	3	2	20			明治31～42年
	美ノ上	13	4	7	2			明治38～44年
	美ノ端	56	10	22	24			明治38～27年
	美ノ浦	63		5	58			明治38～昭和16年
	西日暮	173			30	143		明治41～昭和27年
	西巽頂上	160			13	147		明治40～昭和27年
	中巽	66			10	56		明治33、大正14、昭和27年
	東巽	38			3	35		明治39年
	糯ヶ岡	129			17	112		明治34～昭和27年
	吉備峠	147			21	126		明治38～昭和27年
	吉備浦	43			3	40		明治32・41年、昭和14・32年
	北浦	64				64		明治34、昭和15年
	明見谷	21				21		明治38、昭和15年
	小計	998	17	36	201	744	2	
その他		233	1	1	21	208	2	
総計		3,411	138	184	606	2,477	8	

出典：昭和34年「別子鉱業所社宅現況」（別子銅山記念館所蔵）

の社宅群は、戦前から戦後にかけて別子鉱山鉄道の発達と関連して形成されたといえる。

鉱山会社の社宅分布

昭和34年（1959）10月の住友金属鉱山㈱別子事業所の社宅群を示したものが表1-6である。これによると、社宅は一級から四級に分かれており、一級は建坪21～102坪の一戸建てが8割、二級と三級はそれぞれ17～26坪と11～22坪の一棟一戸ないし二戸建て、四級が7～10坪の長屋建てであった。よって、旧特号・甲号貸家が一級、乙号貸家が二級、丙・丁号貸家が三級、旧労働者貸家が四級に相当する。当時、東平地区には社宅が430戸、端出場地区には1049戸、新居浜地区には701戸、四阪島には998戸、その他を含め合計3411戸の社宅があった。端出場地区は、川口新田社宅が563戸と圧倒的に多く、次いで鹿森の281戸、山根の82戸、打除の33戸などとなっていた。新居浜地区では山田の100戸、前田の130戸のうち、そのほとんどが一級・二級社宅であり、幹部社員の社宅であったことがわかる。北泉以下は、三級と四級社員が混在して住んでいた。また、昭和27・28年に建築された山田アパートは、現代的な集合住宅であった。四阪島は、日暮から美ノ端までが一・二級社員の社宅であり、西日暮以下が四級社員の社宅であった。

ところが、昭和48年3月の別子閉山によって、まず東平・端出場地区の社宅が失われ、その後同51年には、四阪島製錬所の東予製錬所移転によって四阪島の社宅群が廃止されたが、山田社宅・前田社宅など新居浜地区の社宅は工都新居浜の発展に伴い住友各社からの需要が高く、しばらくの間利用された。

【注】

(1)昭和7年5月31日の『郷土研究』第55号（新居浜市立別子銅山記念図書館所蔵）に「改善会総会に於ける田島専務挨拶」があり、田島房太郎専務の経営緊縮策が述べられている。三村起一専務の経営方針については、三村起一自伝『身辺二話』（近代図書　昭和37年）91～113頁、同『流泉八十四年』（和幸出版　昭和47年）138～167頁。

(2) 昭和十年「例規2（鉱業製造）」（住友史料館所蔵）、亀井清太郎『住友生活五十年回顧』（私家版　昭和46年）28頁

(3)『住友別子鉱山史』下巻（住友金属鉱山株式会社　平成2年）、『住友の歴史』下巻（住友史料館　2014年）271頁。

(4)『住友銀行八十年史』（住友銀行　昭和54年）本文136頁、年表79頁によると、当初は出張店、明治34年から支店となる。

(5)『住友海上火災保険株式会社百年史』（住友海上火災保険株式会社　1995年）、『住友生命百年史』（住友生命保険相互会社　平成21年）。

(6)『住友林業社史』下巻(住友林業株式会社　平成11年)。

3．住友山田社宅の歴史的意義

（1）社宅の建築構想と設計者

社宅の景観

住友山田社宅の景観（ランドスケープ）について、昭和22年（1947）の航空写真を参照する（資料編資料2-(1)参照）。写真下（南）半分に昭和4年から造成された住友山田社宅が整然と広がっており、左側（西側）のため池の左隣が昭和12年に新築された別子鉱業所長社宅であり、道をはさんで西側が昭和5年に新築された外国人社宅の2棟である。所長宅の南側、中央街路の柳通りを東側に下る（東進する）と、別子鉱山鉄道の星越駅前広場に出る。星越駅の北側一帯に選鉱場が広がり、その東側が既述した住友私立の惣開小学校、その北側に住友倶楽部と別子住友病院、その西側に住友グラウンドが広がっている。昭和11年からは、星越駅から分岐した新居浜港線が北にまっすぐ走っており、その沿線沿いに前田社宅が建設され、整然と並んでいる。新居浜港線沿いの写真北端に昭和橋駅があり、その東側に泉寿亭がある。昭和11年以降、新居浜地区の社宅は、山田から北側の前田へ広がっていたことが分かる。航空写真から見ても住友社宅は、駅・学校・病院・倶楽部やグラウンドなど社会資本が充実し

表１－７　　住友別子鉱山㈱・住友鉱業㈱土木課の構成員（昭和6年）

所属	名前	役職（昭和6→10年）	経歴
土木係	松尾寛一	課長・係長→課長・技師長	大3. 九州帝大土木課卒→大3. 別子鉱業所
〃	左保田縣	技師→採鉱部研究科	大4. 東京帝大農芸化学卒→大４. 別子鉱業所
〃	町田實	土木係→土木課四阪島派出員	明41. 攻玉社工学校卒→新潟県工手→東京市役所→大7. 別子鉱業所
〃	有松英雄	土木係→土木課設計係代理	明40. 攻玉社工学校卒→新潟県庁→帝国鉄道庁→大3. 別子鉱業所
〃	真鍋準一郎	土木係→係長	大正12. 京都帝大土木課卒→大7. 別子鉱業所→大阪市役所→昭4. 別子鉱業所
〃	塩出豊	土木係→運輸課	大3. 岩倉鉄道・高等建設科卒→東京鉄道管理局→別子鉱業所
〃	渡辺嘉太郎	土木係→同兼設計係（昭11. 1）	大正2. 新居浜講習所卒→別子鉱業所
〃	鈴木一郎	土木係→工事係（昭11. 1）	大4. 工手学校土木卒→秋田大林区署→東洋アルミ等5社→杖立川水力→昭3. 別子鉱業所
〃	斎藤武幸	土木係→課長代理	昭3. 九州帝大土木科卒→昭和3. 住友別子鉱山、昭23. 別子建設社長
〃	丹内為吉	土木課設計係→同兼工事係	大3. 岩倉鉄道・高等建設科卒→陸軍技手→九州帝大助手→住友別子鉱山
〃	仲渡喜代市	不明	不明
〃	本田静千佳	不明	不明
〃	石河広喜	不明	不明
建築係	山野井裙三郎	係長→係長・課長代理	明34. 工手学校造家・土木科卒→明34. 陸軍→明41. 別子鉱業所
〃	林金吾	建築係→工事係長代理	明41. 工手学校建築科卒→東京信託→三菱合資→住友伸銅鋼管嘱託→昭4. 住友別子鉱山
〃	宮崎又三郎	建築係→設計係	大13. 福岡工業建築科卒→大13. 別子鉱業所
〃	鈴木栄次郎	不明	不明
〃	阿倍任美	不明	不明
〃	木村繁	不明	不明

出典：「住友職員録」（住友史料館所蔵）

た場所に立地していた。昭和６年１月に住友山田社宅を視察した郷土紙の記者は、次のように述べている(1)。

仰ぎ見る。星越山一帯の山々は皆頂上を斬られて、台場となつてゐる。奇妙なスタイルだ。その土は運ばれて一帯に六間幅の大道となり、星越の社宅地となつている。外国人の住んでゐる星越の社宅地に行くと、別世界に来た感がある。文化住宅がずらりと並んでゐる。選鉱場の設備が立体的で山上に到る諸機械が働いてゐることが、すでに異様であるに、トンネルがあり、索道あり、タンクあり、瀟洒な停車場あり、坂道あり、町全景を見渡す眺めあり、山あり、川あり、海あり、平野あり、全くよい住宅地である。又、浴場も立派に設けられてゐる。一度は見物したがいい。但自分の住居はイヤになっても責任は持たない。

すなわち、星越山をけずった土砂で造成された住友山田社宅は、外国人が住んでおり別世界というのである。文化住宅が整然と並んでおり、背景の選鉱場は異様であるが、坂道からは町全景が見渡せて、現在の住居がイヤになっても責任は持たないと記されている。新居浜には、それまでになかったすばらしい住環境が突然現れたのである。

建築構想と設計・施工者

昭和４年(1929)に着工された住友山田社宅の開発経過については、住友別子鉱山㈱常務取締役の鷲尾勘解治が前掲自伝で、「私の考えは、この山田の地は工場にも近くて、しかも工場の空気から全く離れた環境の地だから、社員の住宅地としては最適の地であるとしんじていたのであります。そうして従来社宅は板垣をめぐらしていたのでありましたが、私は之を全部生垣に改めて、明るいものにしたのであります。」と回顧している。まさに住友山田社宅は、新居浜における郊外住宅のさきがけであった。昭和５年建築の「外人合宿」（以下、外国人合宿）・外国人東社宅・同西社宅の洋館３棟は、外国人技師用であり、大阪本社(住友合資会社)の工作部建築課（現、日建設計㈱）の小川安一郎が設計した。小川は明治40年（1907）に京都高等工芸学校（現、京都工芸繊維大学）図案科を卒業すると、ただちに住友本店臨時建築部（現、日建設計）に入社した住友生え抜きの技師であり、阪神圏において住友重役の川田順邸（本社常務理事）、今村幸男邸（本社理事）や、実業家の木水栄太郎邸（十合百貨店社長）、池永孟邸（南蛮美術コレクター）、寺井栄一郎邸、池永美術館（旧神戸市立南蛮美術館、現、神戸市立文書館）などの作品がある。昭和４年には８か月にわたり、新興建築工事・設備工事・家具装飾工事取調べのためヨーロッパに派遣されており(2)、山田社宅の洋館３棟はその最新の技術が取り入れられたものと言える。

小川は、神戸の池永邸などに見られるスパニュシュ風建築の名手を持って自認していた節があり(3)、

住友山田社宅の3棟も建物は二階建て、茶褐色の改良スパニュシュ瓦葺きで、外壁は白っぽいペンキふき取り仕上げの明るい洋館であった[4]。その施工は、大阪の藤木工務店（現、㈱藤木工務店）であり、戦前には日本銀行岡山支店（設計：長野宇平治）、住友銀行尾道支店（設計：長谷部竹腰建築事務所）、倉敷の大原美術館（設計：薬師寺主計）、京都の都ホテル（設計：片岡建築事務所）などの作品がある。藤木工務店は、住友総本店の住友臨時建築部に勤めていた山本鑑之進が開業した山本鑑之進工務店を源流としており、店員の藤木正一がこれを継承したもので、住友に関係した工務店であった。

表1－8　藤木工務店の主要施工建築

年次	新居浜	全国
大正11年		**日本銀行旧岡山支店**(岡山市)
大正14年		**都ホテル改築(京都市)**
昭和3年		**大原孫三郎・有隣荘(倉敷市)**、大阪住友倶楽部(大阪市)
昭和4年	鉱山新居浜外国人合宿、山田・新田浴場	倉敷商工会議所(倉敷市)
昭和5年	**鉱山新居浜外国人東社宅・同西社宅**、新居浜高等女学校	**大原美術館(倉敷市)**
昭和6年	別子住友病院山根分院	**岸本吉左衛門邸(大阪市)**
昭和7年		住友神戸別邸(神戸市)
昭和9年		**靖国神社旧国防館(東京都)**
昭和11年	別子住友病院本院、**新居浜住友倶楽部**、**鉱山新居浜山田社宅**、機械新居浜社宅、別子住友職員新合宿所	都ホテル5号館改築(京都市)
昭和12年	機械新居浜事務所・同新居浜第2期社宅・同新居浜研究室、**泉寿亭**、新居浜選鉱場事務所、銀行新居浜支店社宅	**池永孟美術館・邸宅**(旧神戸市南蛮美術館、現神戸市文書館)
昭和13年	四阪島中和工場、鉱山電解室増築	**住友銀行尾道支店(尾道市)** 吉田貞吉邸(東京都)
昭和14年	鉱山ニッケル電解工場	住友大阪職工養成所(大阪市)
昭和15年	機械新居浜従業員寄宿舎、アルミ新居浜工員寄宿舎、生命新居浜出張所、鉱山電錬アンチモニー製錬工場	住友麻布別邸増築、住友本社東京合宿所淡成寮(東京都)、同甲子園合宿所(兵庫県)
昭和16年	アルミ新居浜工員社宅・工具工場、機械新居浜工具工場・仕上工場	**近衛陽明第2文庫(京都市)**
昭和17年	鉱山新居浜職員合宿所、機械新居浜貞固寮増築、新居浜高雄山重要書類庫	小倉正恒邸(東京都)
昭和18年	アルミ新居浜本郷工員社宅	日本銀行本館北分館、**近衛邸・荻外荘改築(東京都)**
昭和19年	機械新居浜前田社宅・同サイクロ工場、化学新居浜南沢津社宅	**近衛陽明文庫閲覧所(京都市)**
昭和28年	機械磯浦アパート、西中学校増築(前年新築)	オリンパス光学本社(東京都)

注(1)：会社名は略称した（住友鉱業→鉱山、住友化学→化学、住友機械→機械、住友アルミニウム→アルミ、住友銀行→銀行、住友生命→生命）
(2)：ゴチックは現存が確認できるもの、但し泉寿亭は特別室のみ。
出典：『藤木工務店五十年の歩み』（藤木工務店　昭和45年）

一方、洋館以外の住友山田社宅の建築設計に当たったのは、鉱山土木課の土木係と建築係である。前掲表1-7にあるように、土木課長は九州帝大土木課卒の松尾寛一であり、同門に真鍋・斎藤・丹内がいる。いずれも端出場水力発電所を設計した林桂一の弟子筋であった[5]。建築係長は山野井裙三郎で、明治34年に工手学校（現、工学院大学）の造家（建築）科と土木科を卒業しており、同門の林金吾は三菱や住友伸銅鋼管での経験があった。宮崎又三郎は、大正13年(1924)に福岡工業学校を卒業した新進気鋭であった。戦後、鉱山から分離して別子建設㈱（現、三井住友建設㈱）が設立されると、斎藤武幸が社長、町田實・鈴木一郎の両名が取締役、丹内為吉と宮崎又三郎の両名がそれぞれ福岡営業所と新居浜営業所の所長となり、現在の三井住友建設㈱の創成期を支えた[6]。

その施工は、鉱山土木課建築係が直営で担当したと思われるが、『藤木工務店五十年の歩み』には、「昭和3年には住友別子鉱山㈱より新居浜外人住宅新築工事を受注、これをきっかけとして住友機械工業㈱、住友化学工業㈱、住友林業㈱など新居浜所在の住友系諸会社の工事の下命を受けることになり、新居浜を四国における営業基盤とするに至った。」と記されている。藤木工務店の新居浜における施工は、表1-8にあるように、昭和4年竣工の山田の外国人合宿・浴場、山根の新田浴場など洋風建築から始まり、昭和10年代に住友各社の社宅・別子住友病院・新居浜住友倶楽部（写真1-2）・泉寿亭、住友各社の事務所・工場など広く手がけた。戦後も昭和40年に住友山田社宅の住友共同電力㈱幹部社宅の西側に、住友化学の単身寮「成簣寮（せいきりょう）」（RC造、4階建て）を建築している。

写真1-2　住友倶楽部（昭和15年）別子銅山記念館所蔵

（2）宅地造成の実態

宅地造成と地ならし

住友別子鉱山㈱土木課の町田實は、山田開発の造成について次のように述べている[7]。

別子銅山の貧鉱処理のため、大正十四年星越選鉱場が完成された。鉱石がクラッシャーで砕かれ、ボールミルで粉となり、油選鉱で銅分が回収せられた残りの滓、鉱石の大部分であって尾鉱と称せられる。これが最下段に設けられた沈澱池に流送せられる。（中略）昭和二年七月、鷲尾さんが別子鉱業所長に就任せられて間もないときであった。私は所長室に呼出され、他の重役より尾鉱処理は予て君が提案して居った流送によることにきまったと云われた。（中略）先ず山田方面の水田の埋立から開始する様指示された。（中略）尾鉱の埋立てでは、草も生えない不毛の地であるので、まず附近山頂の赤土を切り取ってこれに軽便索道で任意の場所に下ろし、尾鉱面を一尺五寸ないし二尺厚保に被覆した。次いで各方面を屈曲縦断している山田川という小川を直線に改修し、縦横に道路網を構築し排水溝を造って、数戸ごとに宅地を区画整地したのである。（中略）家を建てる位置が決まると、四周の土をけずって家の位置を盛り上げ、家の周囲から四周に向かって四十分の一位の勾配をつけて均す。かくすることによって雨水はただちに四周に向かって流れる。見ていても実に気持ちがよい。

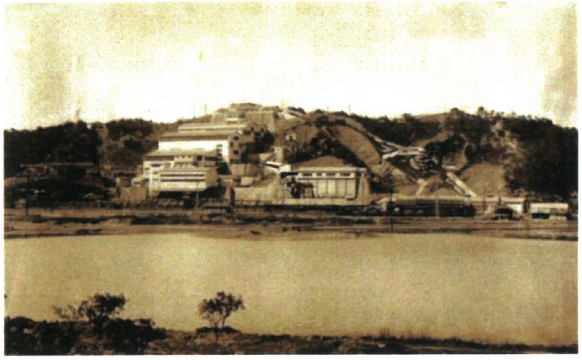

写真 1-3
新居浜選鉱場と沼地（昭和初期）住友史料館所蔵

建築当初の住友山田社宅は、山田川を直線に改修し、東西に延びる谷間の湿地帯を星越山の選鉱場から出る尾鉱（びこう）（廃鉱）で埋め立てた(写真 1-3)。その上には草木が生えるように、周辺の山を切り崩して、その赤土で 1 尺 5 寸（45.5 ㎝）から 2 尺（60 ㎝）ほど盛り土をした。また、縦横に規則的な道路網を構築し、排水溝を掘って区画整理した。宅地はさらに四周をけずって盛り土で高くし、家の周囲から周辺に向かって、40 分の 1 の傾斜角でならすと、雨水は周囲に向かって流れ、水はけがよくなる。こうして、南向きの平均敷地 150 坪（90～426 坪）の宅地が整然と出現したのである。

生け垣と建家の通風・採光

次に町田は住宅地を生け垣で囲い、東西に長い敷地にしたが、その理由を次のように述べている[8]。

宅地の四周に小堤を造りこれを生垣用としてうばめがしの種を播いた。山田で始めて十戸ばかり社宅が建ったので、転宅を勧告せらるに至った。しかし塀に囲まれた家に住み馴れた社員の多くは、これを好まない。命によっていやいやながら越したといってよい。しかし生垣が成長してくると、外部から見えなくなり、屋敷は従来に比して一般に広い。野菜や花卉もよくできる。これは日当たりとともに通気が良いからである。一般に、採光には非常に重きを置くが、通風ということは余り考えられていない風通しのわるい塀の中では、野菜を植えても害虫が着いて育ちがわるい。通風は採光と同様程度に緊要である。こうなってくると人気は全く一変して、転宅希望者は殺到するようになった。（中略）誰でも建物を建てる場合、まず採光ということを考える。しかしとかく通風は閑却され勝ちである。はなはだしきは北側に小窓や高窓を設けて、寒さを防ぐことのみ重きをおいている。南北があいていないと風通りがわるい。従って夏は暑い。北風を防ぐには戸を締めればよい。南と同様に北をあけるためには床の間や押入れは東西に面するようにすればよい。南北の戸を明け放ち風向きに従って箒を煽れば、塵はただちに外方に飛散する。塵とともに黴菌もすっかり追い出されるように思われてはなはだ痛快である。

昭和 4 年(1929)の建家 10 戸ほどの建築当初に、生け垣用としてウバメガシの種を播いたが、まだまだ殺風景であった。社員は板塀に囲まれた社宅に住みなれており、外から見渡せる住友山田社宅は会社

から移転勧告をしなければならないほど不人気であった。しかし生け垣が成長すると、通気がよく、広い敷地の住友山田社宅は社員の人気となった。採光と通気をよくするため、住友山田社宅は東西に長い配置となっており、床の間や押し入れは東側か西側に設置され、南北の通気が通るように配慮されていた。

写真 1-4　外国人合宿（昭和 5 年頃）永井写真館所蔵

（3）建築年次と間取り

建築年次の変遷

山田社宅の建築年次を見ると(資料編資料 1-(2)参照)、まず、昭和 4 年(1929)に池を囲むように 13 戸が建築された。池の西側には、現在の別子鉱業所長社宅はなく、テニスコートがあり、その北隣の外国人合宿は、藤木工務店の施工で建築された（写真 1-4、資料編古写真(2)参照)。翌昭和 5 年に外国人社宅 2 戸と、鉱山 1 号社宅及びその西側に柳通りを挟んで南北に 24 戸が建築された。昭和 6 年には柳通りの南側一帯に 11 戸、昭和 9 年にその東側に柳通りを挟んで 5 戸が建築され、外国人社宅のある高台から星越駅までの中心街区がほぼ埋まった。

昭和 6 年 5 月 24 日の香川修一日記（鉱山庶務課長代理）によると、「猿谷氏（嘉吉：鉱山農林課営林係長）と一緒に散歩に出る。山田舎宅を通り、選鉱場の埋立地を通り、西の土居から金子川を下り一宮神社へ出る。」と記している[9]。住友山田社宅の高台から選鉱場の埋立地が散歩コースになるほど造成が進んでいたことがわかる。

当初の住友山田社宅には、1 棟で 2 戸の建家が 16 棟あり(資料編資料 1-(2)参照)、建築当初は外国人社宅を除き、高級社宅が特別多く建築されたわけではなかった。ところが、昭和 9 年は第 1 章 2.(4)で述べたとおり新居浜 5 社が設立・改称した年であり、住友別子鉱山㈱以外の幹部社宅が西側高台に建てられていった。まず、昭和 9 年に住友化学工業㈱の幹部社宅（元工場長社宅ほか）が柳通りの南側に 5 戸、翌 10 年に 2 戸新築された。昭和 10 年に四国中央電力㈱の幹部社宅が新築され、外国人社宅の西側に 1 号が 1 戸、柳通りの南側に 2 号～4 号の 3 戸があり、1 号に専務取締役吉田貞吉が住んだ。翌昭和 11 年 5 月には住友機械製作㈱ の幹部社宅 12 戸が、電力専務宅の西隣と、柳通り南側一帯に建ち、取締役以下、課長級が住み、星越駅から西側高台までの一帯はほぼ埋まっていった。

昭和 12 年、住友山田社宅のテニスコートのあった場所に別子鉱業所長社宅が新築された。おそらく、鉱山は新居浜を代表する会社として、新たに所長宅を新築したものと考えられる。その後、鉱山は星越駅の南側に昭和 13 年から 15 年にかけて、それぞれ 9 戸、2 戸、10 戸を建てたが、同 16 年 3 月には木材統制法が制定され、12 月には太平洋戦争に突入したため、優良住宅の住友山田社宅は戦後まで着工されなかった。

間取りと設備

鉱山が管理していた 100 戸の建坪は、前掲表 1-4 にあるように、全 100 戸のうち 65 戸が平均 36.4 坪（旧特号・甲号)、23 戸が 20.4 坪（旧乙号)、12 戸が 16.6 坪（旧丙号）となっていた。広い敷地にゆったりとした平屋が並ぶ景観は、前掲の航空写真でも確認できる。なかでも、昭和 12 年(1937)建築の別子鉱業所長社宅は敷地 426 坪、建坪 102 坪におよぶ大規模な邸宅であり、建家は応接室棟、主屋、離れ（茶室）から構成されている。

間取りと設備は、洋館二階建ての外国人社宅 2 戸を除き、日本家屋 98 戸はすべて平屋建てであり、いずれも玄関、床の間、縁側・台所・便所・物置が付いていた。表 1-9 にあるように、そのうち 6 戸が洋間付き、84 戸が浴室付き、26 戸が 2 戸 1 棟造りであり、すべてに物置が付いていた。建築年次を見ると、昭和 4 年の建築当初に 9 部屋以上の大社宅（別子鉱業所長社宅を除く）と 3 部屋の小社宅が作ら

れ、昭和 15 年頃までに中間層の社宅が多く作られたといえる。これは、社宅規則の階層分化が平準化していくことに照応している。間取りは、2 畳・3 畳・4.5 畳・6 畳・7.5 畳・8 畳・10 畳の 7 種類があり、部屋数は最大の 12 室から最少の 3 室まであった。2 戸 1 棟作りの 26 戸は部屋数が少なく、20 戸が 4 部屋、6 戸が 3 部屋であった。

部屋数別に戸数を見ると、12 室が 1 戸（別子鉱業所長社宅）、10 室が 1 戸（鉱山 5 号）、9 室が 2 戸（鉱山 1 号・4 号）、8 室が 4 戸（鉱山 8 号・20 号・61 号・77 号）、7 室が 5 戸、6 室が 17 戸、5 室が 25 戸、4 室が 36 戸、3 室が 7 戸となっており、4 室から 6 室が全体の約 80 パーセントを占めており、

表１－９　山田社宅の間取りと設備

部屋数	軒数	洋間数	和室数	洋間付	浴室付	2戸１棟	建坪	建設年
	戸	室	室	戸	戸	戸	坪	
１２部屋	1	1	11	1	1		102.0	昭和12
１０部屋	1	0	10		1		61.0	昭和４
９部屋	2	1	8	2	2		54.0～65.5	昭和4･5
８部屋	4	1	8	3	1		45.3～70.6	昭和4・12・23(1戸洋間なし)
７部屋	5	0	7		5		55.5～70.6	昭和5～16
６部屋	17	0	6		17		31.4～43.7	昭和4～15
５部屋	25	0	5		25		24.1～32.5	昭和4～15
４部屋	36	0	4		32	20	18.2～24.8	昭和5～14(2戸は昭和24)
３部屋	7	0	3		0	6	18.2～24.8	昭和4(１戸は昭和7)
合計	98	3	62	6	84	26		

註：住友別子鉱山㈱の100戸の内、外国人社宅2戸を除く。
出典：昭和34年「別子鉱業所社宅現況」（別子銅山記念館所蔵）

これが住友山田社宅の平均的な部屋数であった。全体として、住友山田社宅の敷地・建坪・間取り・生垣の外構などをみると、かなり優良なものであったといえる。

（４）戦前の外国人社宅と幹部社宅の生活

本項では、社宅に暮らした人物とその生活状況について触れる。昭和 4 年(1929) 6 月、住友別子鉱山㈱では四阪島製錬所の煙害問題解決の切り札となるペテルゼン式硫酸工場の第一期工事が完成した。これは、ドイツ人のフーゴ・ペテルゼン（Hugo Petersen）が発明した技術で、昭和 4 年 8 月にペテルゼンが工場視察のため来日した(10)。これが契機となって翌昭和 5 年に外国人技師用の社宅が作られることになったと考えられる。

昭和 5 年に新築された住友別子鉱山専務取締役の田島房太郎の社宅では、新年の従業員接伴が行われ、翌 6 年には外国人東社宅には、ドイツ人技師ガーレップ（Gareppu）夫妻が住んでいた。道をはさんだ東側には、洋室を多数備えた外国人合宿があり、東側に付属の日本家屋、その南側に借景としての池とテニスコートがあった。昭和 10 年に新築された四国中央電力㈱の 1 号社宅には、専務取締役の吉田貞吉家族が住んでいた。

ガーレップ夫妻と外国人社宅

昭和 5 年秋に住友別子鉱山製作課機械係の早川幸市は、ドイツ国デマーグ（Demag）社において同社技師のガーレップと起重機（クレーン）の技術導入を交渉し、翌 6 年 7 月から 3 年の契約で新居浜に夫婦で来てもらうことになった。早川によると(11)、「ガレップ氏は山田の外人社宅（坂を登りきって最初の右角）に住まわれた」と証言しており、夫妻が住んだのは、外国人東社宅と判断される。昭和 6 年 7 月 7 日の香川修一日記によると、「朝一寸星越の外人住宅を見る。」とあり、香川は庶務課長代理としてガーレップ夫妻を迎える準備のため、外国人社宅を下見している。また、7 月 11 日の歓迎会は盛大であり、前掲「香川修一日記」には次のように記している。

猛烈なる降雨なり、十時半ガーレップ夫妻は雨中やってきた。午后挨拶にやって来た。よいおぢいさんである。晩、歓迎の晩餐会がある。又それの準備に忙がしい。六時に一度帰り、六時半から接待館に行く。洋食である。夫人にも会ふ、英語が判りにくいので、大抵ドイツ語である。常務（龍

野昌之）殆ど一人で相手をされる。後は皆片言交じりである。専務（田島房太郎）と常務の夫人も見えたが、ガレップ夫人の社交ぶりには感じ入った。

歓迎会は、惣開の鉱業所事務所に隣接した接待館で行われ、洋食を食べながらドイツ語での会話であった。ガーレップ夫人の社交ぶりに驚いたとあるが、早川によると「夫人は教養も高く、社会的にも知られた方で、ライン地方の連合婦人会長をせられたこともある」賢夫人であった。同じく住友山田社宅の生活について、早川は「夫人は病身で、正午から二時間ばかり毎日きまって午睡をとっておられたが、万事節約する典型的ドイツ夫人であった。電灯点滅のきちょうめんなこと驚くばかりで、電灯代は会社持ちであったから自然ルーズになり勝ちと思われるのにと、大いに教えられたものだ。」と述懐している。

また、夫人は惣開小学校でドイツ語の講習会を行い、時々英字新聞に随筆を投稿していた。ガーレップ本人についても「ガ氏は紙を大事に使う人であった。便箋紙の端の方から小さな字で書き始め、一杯になると逆さにして行間を埋め、更に裏をも使うという具合。鉛筆も持てなくなるまで使い、第一次世界大戦を経験したドイツ人として典型的“スバールザム”（倹約）を誇りとしていたのを思いおこす。」と述べている(12)。夫婦そろってまじめな倹約家であり、住友山田社宅での生活を満喫していたようだ。ガーレップは、新居浜に2年余り滞在し、帰国後に定年退職し、昭和36年(1961)に87才で亡くなった。

要人宿所としての外国人合宿

昭和５年(1930)、住友別子鉱山㈱機械課では既に述べたクレーン技術やスイスのブラウンボベリー社（Brown.Boveri）の電気機器の導入を検討していた(13)。昭和４年11月、㈱住友肥料製造所はアメリカのＮＥＣ（Nitrogen Engineering Crop.）社の技師リチャードソンらを新居浜に招聘し、翌５年12月にアンモニア・硫安工場が完成した。昭和８年にはＣＣＣ社（Chemical Construction Crop.昭和９年にＮＥＣ社を吸収合併）と契約して翌年に接触硫酸工場が完成し、昭和 12 年には同社と硝安技術導入契約を締結している(14)。おそらくこれらの技術導入に伴い、外国人合宿は技師の単身・短期宿泊用として作られたと考えているが、老朽化のため昭和 63 年以降に解体された。実際、化学専務の大屋敦日記によると(15)、昭和12年１月13日に「外人合宿ニ Hecker（ハッカー）夫妻ヲ招待小宴ヲ催ス」とあり、外国人合宿が接待場となっている。昭和12年４月21日には元ＮＥＣ社の副社長フレデリック・ポープ（Frederick Pope）夫妻が新居浜を訪問したが、大屋日記には「正午過、新居浜エ入ル、外人合宿ニテポープト昼食ヲ共ニス、」とあり、翌日に「ポープヲ製作所ニ案内ス、設備ノ完備ニ驚嘆セル如シ、三村君外人合宿ニポープヲ招待ス」とある。化学の来客を鉱山専務の三村起一が招待したことがわかる。

昭和 15 年５月の別子開坑二百五十年祭では住友吉左衛門の宿所となり、昭和 17 年５月の東条英機総理大臣の新居浜視察では東条が泉寿亭に宿泊し、住友総理事古田俊之助と住友本社理事三村起一は外国人合宿を宿所とした(16)。外国人合宿は住友山田社宅の高台にあり、周辺に住友各社の最高幹部が住んでおり、打合せや警備など利便性があったと考えられる。

田島鉱山専務社宅での新年宴会

昭和６年(1931)7月から鉱山庶務課長代理香川修一は、鉱山専務取締役の田島房太郎に仕えた。田島専務は明治40年に東京帝国法科大学法律学科を卒業すると、ただちに住友本店庶務課文書係に勤務し、以後は住友伸銅場（日本製鉄㈱・住友電気工業㈱の前身）、住友合資会社（住友本店・総本店を改組）の重役を歴任したあと、大阪北港㈱の常務取締役から鉱山専務取締役に栄転した人物である。鷲尾勘解治の後任として苦労したことはすでに述べた。昭和７年１月１日の前掲香川日記には、田島専務の社宅（鉱山１号カ）での新年挨拶のようすを次のように記している。

七時過ぎに支度を整して出る。支配人（住友別子鉱山：龍野昌之）宅へ挨拶に寄り、自動車で吉田常務（貞吉：四国中央電力）と三人山根へ伺ふ。大山積神社初荷に社員・労働者全員集って新年大

鉛の式を厳かに取り行ふ。万事滞りなく行って、それから事務所に帰る。事務所の祓をすませたのが十時半、それから高木（茂正：鉱山庶務課係長）・岡田（武一：鉱山秘書係長）・中村（斎太郎：鉱山文書係）と連れ立って常務宅（龍野：鉱山支配人兼任）へ挨拶に行き、山田へ出て増谷氏宅（平八：鉱山副支配人・採鉱部長）

へ行き、それから専務宅（鉱山：田島房太郎）へ入り込む。一渡り御馳走になって大に主人役の接伴をやる。そこへ次から次へと続々と詰めかける。接伴に暇がない、蓄音機をかけたりして、四時頃やっと一段落となった。

香川は惣開社宅で新年の支度を整え、江口社宅の龍野鉱山常務兼支配人へ新年の挨拶に伺い、自動車に同乗して原地社宅の吉田電力常務宅へ向かい、三人同乗して大山積神社の新年大鉛式に参列した。その後、鉱山事務所に帰り、事務所の祓えを終わって、同僚の高木茂正・岡田武一・中村斎太郎と龍野常務宅へ改めて新年の挨拶に行き、それから住友山田社宅の増谷平八副支配人宅と田島房太郎専務宅へ挨拶に伺った。田島専務宅では、一通り御馳走になった後、田島専務になり代わり社員の接伴役を担当し、ひっきりなしに詰めかける社員の応対をして、ときには蓄音機を掛けたこともわかる。鉱山専務宅での新年は、かなり賑やかな元旦であったことが窺える。

吉田電力常務社宅での生活

昭和 11 年(1936)1 月 1 日、四国中央電力㈱常務取締役（昭和 13 年に専務取締役）の吉田貞吉は原地社宅から新築の住友山田社宅に転宅し、新年を家族で迎えた。吉田は、三代総理事鈴木馬左也と同郷の宮崎県高鍋町の出身であり、明治 40 年(1907)に京都帝国大学理工科大学電気工学科を卒業すると、ただちに住友に入社し、別子鉱業所機械課電気係に勤務した。以後、新居浜在住のまま別子鉱業所、住友別子鉱山㈱の役員、土佐吉野川水力電気㈱（四国中央電力㈱）の常務・専務、㈱住友本社の理事、住友化学工業㈱の社長を歴任した人物である(17)。また、彼の趣味はゴルフであり、昭和 11 年春に新居浜の住友幹部と同好会を結成し、瑞応寺と広瀬邸の間に 6 ホール 3000 坪の山田ゴルフ場を開設した。愛媛県最初のゴルフ場であり、吉田は県内のゴルフ指導や、会社の接待などに利用したが、戦時中の昭和 15 年に閉鎖された(18)。

吉田の社宅は昭和 10 年 3 月 20 日に竣工し、その敷地は 383.57 坪、建坪は 80.61 坪とかなり広く、洋間の応接室 1、座敷 4、居間 2、女中室 1、食堂 1、台所 1、納戸 1 の合計 11 部屋があった。昭和 11 年に新居浜在住約 30 年を迎えた吉田は、新年のようすを次のように記している(19)。

新居浜ニテ新年ヲ迎フ、家族綾の、宏子、剛、和子、民子ナリ、猶一両日前ヨリ来訪中の Mrs.Rasch 及女中二人、臨時女中一名、合計 10 人ノ正月ナリ、天気宜敷、明朗平和ノ正月也、而モ金子村大字金子 1900 番地（山田住宅地）ノ新社宅ニテノ初メテノ新年ナリ、午前 6 時起床、一同祝膳ヲツク、7 時 15 分発自動車ニテ川口新田大山積神社ノ大鉛祭式ニ参列ス、午前 11 時ヨリ鉱山会社広間ニ於ケル新年祝賀会ニ出席、自分開会ノ一言ヲ述ブ（中略）

正午自宅ニ全社員ヲ招キ祝宴ヲ催ス、来会者 26 名、他社 1 人達モ来訪者数名アリタリ、今日写真ヲ撮ル、新社宅ヲ背景トス

吉田貞吉は、惣開の住友機械製作㈱に隣接した社宅から山田の新築社宅に移転したが、その家族は妻の綾乃と一男三女の子供、家庭教師のアメリカ人ラッシュ、そして女中 3 人の合計 10 人であった。吉田邸の正式地番は金子村大字金子 1900 番地であり、山田は小字名であった。正月は 6 時に起床し、皆で祝膳のあと、貞吉一人 7 時 15 分に自動車で大山積神社の大鉛祭に出かけた。この点は、昭和 7 年の正月と共通している。その後は惣開の鉱山会社広間で、おそらく新居浜各社を集めての新年祝賀会があり、電力会社を代表して吉田が挨拶したことがわかる。正午に自宅へ帰ると、電力会社の全社員 26 人ほかを呼び祝宴を催し、新社宅を背景とした写真を撮った。また、昭和 15 年 4 月 17 日の吉田日記によ

ると、新入社員の歓迎会について、「本日夕五時ヨリ本年度新採用社員十七名及部課長ヲ自宅ニ招待シテ、夕食（茶話会）ヲ催ス。」とあり、部課長と新入社員17人を集めて夕食を振る舞っている。

昭和10年の「社宅矩計図」と同42年の補修平面図（図1-6）によると、建家は大きく東側の来客用、西側の家族用に分かれる。来客用には本玄関があり、ホールの東側に3畳の書生室、西側の物入れがゴルフ道具入れ、南側に14畳の応接室とテラスがある。その西側には縁側沿いに10畳の客間と6畳の次の間があり、宴会も可能である。その西側一帯が家族用の空間であり、内玄関を入ると、廊下を挟んで東側に10畳の居間、西側に4.5畳の女中室と納戸があった。その南側には6畳主婦室と10畳の子供室（昭和10年当初は8畳ずつ）があった。ふたたび、内玄関に戻り、その西側に板敷きの食堂と台所があった。山田の幹部社宅は単なる住まいではなく、パブリックな要素を持つ工夫がなされており、社員などを迎えて供応する空間を充分備えていたと言えよう。これを裏付けるように、昭和13年12月31日の吉田貞吉日記には、「年末は新居浜山田ノ宅ニ、シカモ立派ナルヒロイ新宅（社宅）ニ家族一同、宏子達三人ハ共ニ本年ノ幸福ヲ感謝シ、越年ヲナスコト、真ニ仕合ノ至ナリ」と記している。

別子鉱業所長社宅と住友化学幹部社宅のようす

昭和12年(1937)2月7日に新築された別子鉱業所長社宅と、同10年の住友化学幹部社宅の住人と生活のようすは、史料が見つかっていないのでよく分からないが、残された史料によって推測してみる。まず、別子鉱業所長の三村起一は昭和7年2月から鉱山のトップとなり、当初は外国人東社宅に住んでいたことが家族写真から判明する。昭和12年6月、三村は住友鉱業㈱発足と同時に専務取締役兼別子鉱業所長に就任し、同15年4月までその任にあったが、昭和12年2月は別子鉱業所長社宅が新築された直後であり、三村が入居したであろう。昭和12年5月14日に三村専務の母由が社宅で亡くなったが、近所に住む四国中央電力㈱の吉田常務はそのようすを次のように記している。

5月14日　本日三村起一氏宅、母堂逝去セラル、御悔ニ行キ二時間位居タ（以下略）

5月15日　（前略）夜九時帰宅ス、直ニ三村氏御通夜ニ行ク、午前一時頃帰宅ス

5月16日　（前略）夜分、三村氏ニ行ク、本日午後三時五十三分ニテ綾の東京ヨリ帰宅ス、一ヶ月半振リナリ、三村氏不幸ニツキ帰宅セルナリ、本夜三村宅移霊祭アリ

5月17日　本日三村起一氏母堂ノ告別式アリ、午後一時半棺前祭参列ス、吉野・北沢氏来宅セラル、盛大ナル告別式ナリキ（以下略）

吉田常務は5月14日の逝去の日から16日まで、お悔やみ、通夜、告別式と連日出かけている。その間、東京滞在の妻綾乃も呼び寄せた。三村は地域社会を代表する鉱山専務という地位にあり、盛大な告別式は新築間もない別子鉱業所長社宅であったと考えられる。また、昭和17年9月1日、化学専務の大屋敦が住友を辞職し、12日に新居浜の住友倶楽部で送別会が開かれ、送別会後に荒川英二別子鉱業所長社宅（三村の後任）に招かれている。大屋日記に「クラブニ化学・アルミ幹部と御別レノ宴会ヲ共ニス、別子荒川氏宅ニ招カル」とあり、おそらく洋間の応接室で面会したと思われ、新年宴会なども田島専務と同じように行われたと考えられる。

次に、住友化学幹部社宅については、昭和8年12月から㈱住友肥料製造所（昭和9年、住友化学工業㈱に改称）専務となった大屋敦が住んでいたと考えられる。昭和15年5月8日の大屋敦日記によると、この日は別子開坑二百五十年祭の前日であるが、住友倶楽部に新居浜五社の主管者が来賓の住友主管者を招待し、大屋は「夕八時帰宅、独リ食事ス」とある。おそらく住友化学幹部社宅で夕食を済ませたのであろう。昭和17年9月11日には、先述したように大屋専務の送別会が新居浜で開催されたが、午後4時に50分新居浜港発のスミレ丸乗船に際し、日記には「各社幹部・夫人、化学職員、青年学校生達、工友会代表、地方有力者多数盛大ナル見送リヲ受ク」と記している。化学の専務は、会社ばかりでなく地方有力者の見送りを受ける名士であった。化学の幹部社宅はそれに見合うものであった。

写真 1-5　共電幹部社宅（吉田常務社宅）

写真 1-6　吉田常務社宅応接室での家族写真
（昭和 10 年代）住友史料館所蔵

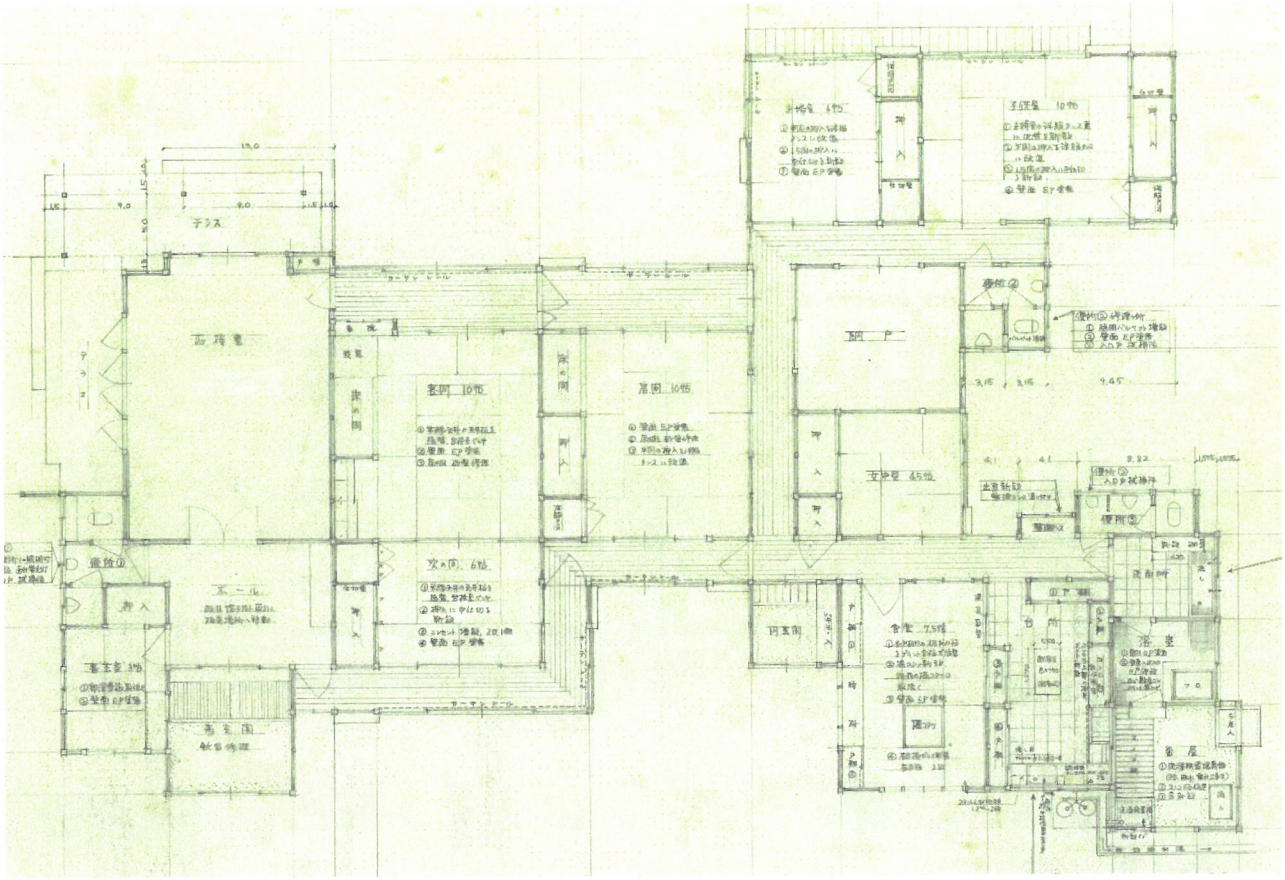

図 1-6　山田社宅 1 号補修工事説明図（部分）（昭和 42 年 10 月 27 日）住友共同電力㈱所蔵

住友山田社宅と別子開坑二百五十年祭

昭和 15 年(1940)5 月 9 日、新居浜の山根にある大山積神社で別子開坑二百五十年の記念式典が開催された[20]。同日の午前 9 時から大山積神社で元禄 4 年(1691)の開坑から 250 年を迎えた喜びを祝し、午後から瑞応寺で追弔法会を執行し、初代住友総理事の広瀬宰平墓所に墓参した。午後 4 時からは住友倶楽部で祝宴会が開催され、来賓のほか、新居浜市長ほか地方名士、新居浜各社の係長級以上が招待された。大広間での挨拶が終了すると、一同は洋風庭園の園遊会場に移り、大阪の灘万・つる屋など一流料亭の模擬店がならび、午後 7 時に終了した。前日と当日の来賓の宿泊所は次のようになっていた。

外国人技師合宿	16 代住友吉左衛門友成、分家住友元夫（16 代実弟）、随行員など 4 人
接待館(惣開町)	住友総理事小倉正恆、本社専務理事古田俊之助、本社部長・随行員など 7 人
泉寿亭(北新町)	代議士、住友末家、本社理事、住友連系会社専務・常務など 22 人
西条福亭(西条町の旅館)	大阪鉱山監督署長・愛媛県総務部長の 2 人
山田社宅の幹部宅	住友連系会社役員・本社幹部など 11 人
旅館 5 か所	住友本社・連系会社幹部 23 人

これら来賓 69 人の宿所は、所属と職位により区分され、住友家当主と分家一行が山田社宅の外国人合宿（別子鉱業所長社宅の北隣）であった。同所は二階建ての瀟洒な洋館であり、ボーイが 1 名詰めて洋食が出された。以下、住友経営トップの総理事・専務理事は別子鉱業所事務所に隣接した接待館、代議士・住友ＯＢの末家・本社理事・住友連系各社の専務・常務は、昭和橋駅近くの泉寿亭、大阪鉱山監督署長・愛媛県総務部長は愛媛県の出先機関のある西条町の旅館、住友連系会社の役員・本社幹部は山田社宅の幹部社宅、その他の本社・連系会社幹部は新居浜の旅館に分かれて宿泊した。

写真 1-7　住友倶楽部 園遊会（昭和 15 年頃）
別子銅山記念館所蔵

5 月 8 日の吉田貞吉日記にも「総理事、専ム理事等沢山来浜セラル、又各社宅ニハ職員分宿ス、自宅ニハ斎藤洲司来宿ス、家長公ハ外人合宿ナリ、総理事、専ム理事ハ接待館ナリ」とあり、これが裏付けられる。また、山田社宅には住友の社員が分宿し、吉田宅には斎藤洲司が宿泊したとあるが、実際は次のとおりである。(以下、住友本社→本社、住友鉱業→鉱山、住友化学工業→化学、住友機械製作→機械、四国中央電力→電力、住友銀行→銀行、住友信託→信託、住友倉庫→倉庫と略称)

吉田貞吉宅（電力専務取締役）	宿泊者　斎藤洲司（信託常務取締役）
高橋又次郎宅（機械総務部長）	同上　福山善治郎（信託常務取締役）
	同上　松井孝長（倉庫常務取締役）
安井冨士三宅（鉱山別子鉱業所事業部長）	同上　香川修一（本社人事部人事課長）
	同上　津田久（本社経理部鉱山課課長心得）
水谷誠鈇宅（鉱山別子鉱業所採鉱課長）	同上　永野栄（鉱山日光鉱業鉱長）
	同上　進藤淳之佑（本社技師）
	同上　松尾寛一（元鉱山別子鉱業所技師長、土木課長）
西村泰宅（別子住友病院内科医長）	同上　岡本亀男（大阪住友病院院長）
藤井敬三郎宅（電力新居浜火力発電所査業長）	同上　荒井二郎（鉱山営業部金属課長）
村田文三郎宅（銀行新居浜支店長）	同上　平佐周三郎（本社林業所京城販売店支配人）
川瀬愼一宅（機械販売係長）	同上　源間保三（本社林業所呉販売店支配人）

これによると、山田社宅に分宿したのはいずれも役員・幹部社員であった。すなわち、電力の吉田専務と機械の高橋総務部長宅には連系会社の役員、鉱山の安井事業部長宅には本社の課長級、鉱山の水谷採鉱課長宅には鉱長・技師長、別子住友病院の西村内科医長宅には大阪住友病院長、電力の藤井査業長宅には鉱山の金属課長、銀行の村田支店長宅と機械の川瀬販売課長宅には本社林業所販売店の支配人（平佐は銀行出身）が宿泊した。いずれも役職や仕事内容を配慮して分宿場所を決めたことがうかがえる。これと規模や階層は大いに異なるが、大正天皇の御大典のときに南禅寺周辺の実業家の別荘が高位高官の宿所となっており、その類似点が興味深い。

（5）戦後の住友山田社宅

戦後の景観と幹部社宅の生活

昭和22年（1947）の航空写真が残っており、これがほぼ戦前のようすを示す全図でもある(資料編資料 2-(1)参照)。当該エリアには池の西側に別子鉱業所長社宅、その北側に外国人合宿、道路をはさんで西側に外国人東社宅と西社宅がある。その西側に共電幹部社宅、道路を挟んで南側の列の東端に住友化学幹部社宅（愛媛工場長宅）が確認できる。戦後の別子鉱業所長社宅は、住友金属鉱山㈱の別子事業所長の社宅となり、昭和30年代までは、所長社宅に新入社員が招かれ、茶話会が開かれた。その後、高度成長経済期を経て昭和50年代ごろから単身赴任者が多くなったという[21]。戦後の住友化学幹部社宅と共電幹部社宅は、それぞれ住友化学㈱の愛媛工場長社宅と住友共同電力㈱（旧四国中央電力㈱）の社長社宅となった。昭和34年（1951）には共電幹部社宅の敷地内に、共電監査役社宅が新築された[22]。

また、昭和28年には住友新居浜5社（鉱山・化学・機械・建設・共電）の有志で住友新居浜ゴルフ同好会が結成され、山田社宅の南側斜面に1ホールでスタートした。昭和32年9月には6ホールが完成し、現在に至っている。山田社宅はゴルフ場付きの社宅であるが、それは戦前に共電専務・化学社長を務めた吉田貞吉が種を播いたものであった[23]。

一方、昭和26年6月22日に鉱山と建設の招きでフーゴ・ペテルゼンの子息のゲルト・ペテルゼン（Gerd Petersen）が新ペテルゼン式硫酸製造法の技術指導のため、7月8日まで2週間ほど四阪島と新居浜に滞在し[24]、翌27年11月22日には、機械が四阪島に新グリナワルト焼結炉建設のためJ・H・グリナワルト（Greenawalt）を新居浜に招いているので[25]、外国人社宅や外国人合宿が利用された可能性がある。昭和22年の航空写真に写っている外国人合宿は、同63年の写真にも写っているので、その後、とりこわされたのであろう。また、外国人東社宅は、外国人合宿に代わる幹部の単身赴任宿所となり、各室独立した和室に改造されるなど大きな改変が加えられた。幸い外国人西社宅は附属の日本家屋が増築されたので、洋館部分にほとんど手を加えられずに往時の姿をよく残している。

昭和50年頃の全貌

昭和50年代の住友山田社宅を社宅企業別区画図面（資料編資料 1-(1)参照）により、全戸数295戸の分布を見てみると、旧星越駅前広場を中心に大きく西側と東側に分かれる。すなわち、その凡例に従って表記すると、西側の高台に向かって水色の鉱山社宅が、東側の平地に向かって赤色の化学社宅が広がっている。西側を子細に見ると、中心街路の柳通りより北側に鉱山の社宅群があり、ため池の西隣が別子鉱業所長社宅である。その西側に外国人社宅の洋館2戸と鉱山社宅2戸があり、さらに西側に薄緑色の共電幹部社宅と監査役社宅、および青色の重機の集合住宅がある。柳通りをはさんで南側に、共電幹部社宅3戸と住友化学幹部社宅1戸がある。その東側には化学と紫色の建設の社宅があり、その東側三区画には鉱山と建設の社宅、その南側に重機8戸、緑色の林業5戸、化学3戸、さらに南側一帯に灰色の海上1戸、薄茶色の生命6戸、共電5戸が分布していた。東側を子細に見ると、化学の社宅群が密集しており、その西端に海上1戸、銀行の星越寮など3戸があった。全社宅数295戸の会社別内訳は、鉱山102戸、化学144戸、重機16戸、共電10戸、建設8戸、林業4戸、生命6戸、銀行4戸、海上

1戸となっていた。戦後の住友山田社宅は、住友グループ各社の幹部社宅と位置づけることができる。

その後の社宅

昭和61年から平成3年（1986～1991）にかけて、日本は戦後最大の好景気を謳歌し、バブル経済と呼ばれたが、平成3年にバブルが崩壊し、その後長く経済の停滞が続いた。その間、昭和62年の国鉄民営化による新幹線の高速化、昭和63年の瀬戸大橋の開通、これにともなう航空便の対応など交通網の発達、あるいは東京一極集中による進学問題などから、住友社員の単身赴任が増加し、住友山田社宅のような戸建て社宅の需要は減少傾向にあった。平成14年～19年の航空写真によると（資料編資料2-(3)参照）、住友山田社宅は216戸写っているが、昭和4年の建築から70年以上を経過して老朽化が進み、その後、平成7年の阪神大震災以後は耐震基準も厳しくなったので社宅の取り壊しが始まった。平成17年には197戸、同20年には鉱山の西側社宅群、同16年から同19年3月までに化学の東側社宅群がなくなったので、71戸まで減少した。こうして、別子鉱業所長社宅は平成12年6月から空き家になって現在（令和元年）まで19年が経ち、住友化学幹部社宅も平成16年に空き家になってから同じく15年が経過していた。

平成22年、新居浜市は住友共同電力株式会社から共電社宅1号（社長社宅）と5号（監査役社宅）の2棟の寄贈を受け市が管理している。平成30年8月1日現在、住友山田社宅は修復分を含めてわずか34戸となり、その内訳は鉱山29戸、化学3戸、元共電2戸（新居浜市移管分）となった。平成31年3月には、住友金属鉱山から別子鉱業所長社宅・外国人東社宅・西社宅の3棟、住友化学から住友化学幹部社宅1棟、合計4棟が市に寄贈され、それ以外は解体された。

【注】

(1)昭和6年6月15日の『郷土研究』（第46号）の「町内ブラ突き記」。

(2)坂本勝比古『日本の建築・明治大正昭和－商都のデザイン』（三省堂　昭和55年）140・141頁。

(3)山県政昭「建築家小川安一郎について」（『デザイン理論』33号　1994年）53頁。

(4)山本秀雄『歴史に学ぶ』（藤木工務店　平成9年）145頁。

(5)斎藤武幸『明治から平成へ―住友と共に六十年―』（日本工業新聞社　平成2年）96～99頁。同氏「丹内為吉君の死を悼む」（『別子建設月報』第68号　昭和29年）、林桂一「端出場水力発電所工事の思ひ出」（『別子建設月報』第79号昭和30年）。

(6)『住友建設五十年史』（住友建設株式会社　平成12年）ほか。

(7)(8)町田実「住友奉職三十五年を追想して（五）尾鉱流送」（『別子建設月報』第66号　昭和29年）、「同書（六）社宅の経営」（『別子建設月報』第69号　昭和29年）。

(9)「香川修一日記」（住友史料館所蔵）。

(10) 昭和4年「処務報告書　庶務課文書係」（住友史料館所蔵）。

(11)(12)早川幸市『住友機械六十年史物語』（住友機械工業株式会社　昭和43年）83～85頁。

(13)注(11)掲載書48～50頁。

(14)『住友化学工業株式会社史』（住友化学工業株式会社　昭和56年）48頁、60頁。

(15)「大屋敦日記」（住友史料館所蔵複製本）。

(16)亀井清太郎『住友生活五十年回顧』（私家版　昭和46年）51・52頁。

(17)注(11)掲載書61～63頁。

(18)昭和11年の「吉田貞吉日記」（津上ヴィブエ友子氏所蔵）、『愛媛ゴルフ史』（愛媛新聞社　平成10年）13～20頁。

(19)注(18)の「吉田貞吉日記」。

(20)「別子銅山開坑二百五十周年記念録　巻二　記念行事準備事項」（住友史料館所蔵）、以下の記事は本史料による。

(21)　上垣起一氏（元別子銅山記念館長）の談話による。

(22)住友共同電力株式会社所蔵史料。

(23)『益友』第60巻6・7・9号（自彊舎記念会　昭和25年）。

(24)(25)「ペテルゼン氏来朝―新居浜での技術指導―」（『別子建設月報』第32号　昭和26年）、「グリナワルト氏来日」（同上書第49号　昭和27年）。

4．むすび ―住友山田社宅の歴史的価値―

別子銅山と新居浜は、300年にわたる鉱山の発展過程を物語る街である。別子銅山の事業は、鉱脈を地中深く掘り進むにつれ、海抜1000メートルを超える別子山中から、東平・端出場・新居浜を経て、沖合20キロメートルの四阪島までひろがった。鉱山では、ひとびとが働くための施設とともに、学校・病院・劇場・社宅など生活関連施設も必要とした。鉱山の歴史は、町づくりの歴史といっても過言ではなく、社宅と密接な関係にある。

平成21年（2009）に社宅研究会によって調査された全国の社宅290件のなかに、住友別子銅山の上述の社宅が時代別に列挙してある。この調査では平成21年現在に現存するものを太字で示しており、それをまとめたものが表1-10である。これによると、全社宅290件のうち現存するものはわずか50件であり、それから10年ほど経過しているので、その実数はさらに少ないものになっているだろう。

平成21年の地域別分布を見ると、四国本島では住友山田社宅だけが残っており、その数約290戸は全国有数の規模であった。それが現在（令和元年）、別子鉱業所長社宅など6棟となり、保存活用計画がまとめられ一般公開に向けて整備される予定である。以下、住友山田社宅の歴史的意義についてまとめる。

①郊外住宅の思想を持った社宅

昭和2年（1927）、別子鉱業所長に就任した鷲尾勘解治は、別子銅山の歴史に学び、企業と地域社会が共存共栄の理念のもと、永続的に継続できる方策を探求し、その一つとして住友山田社宅を建設した。別子鉱山鉄道の星越駅に隣接し、事務所や工場のある惣開と採鉱本部のある端出場の間に位置し、通勤に便利であった。昭和12年には新居浜港線、同17年には省線新居浜駅と連絡し、新居浜港と新居浜駅から外部につながった。

昭和6年から社宅の建設は、田島房太郎・龍野昌之・三村起一の歴代鉱業所長や化学・電力（共電）の幹部に引き継がれ、同15年頃にほぼ完成を見た。その間、住友私立の惣開小学校と別子住友病院、社交場の住友倶楽部、住友専用旅館の泉寿亭などが新築され、郊外住宅をとりまく社会的インフラとして整備された。

住友山田社宅は、外国人社宅や幹部社宅が建ち並んでおり、官営八幡製鉄所の長官官舎や満鉄など旧植民地における国策会社の幹部社宅のような郊外住宅の思想のもと、良好な住環境と高水準の住宅をめざした社宅であった。設計・施工は住友別子鉱山㈱土木課（後の別子建設㈱）、洋館や昭和10年代の社宅の施工は藤木工務店を用いており、その質の高さと建築の多様性は、社宅を単なる仮の住みかではなく、別子銅山とそれから派生した事業が共に永続することを希求した表れと見るべきである。それゆえ、都市部から社員が家族づれで転勤するようになり、平成20年（2008）頃まで約80年間にわたり住み続けられたのである。

②典型的な社宅景観

社宅は、会社所有の福利厚生施設である。それ故、第1章2.（4）の社宅規程で述べたように、職階によって居住空間が定められていた。ひな段状の住友山田社宅は、幹部職員の職位によって坂道の下から上へ向かって建坪が大きくなっていく傾向にあったが、すべて一様ではなく、時代により一部混在している。最上位に位置するのが、西側高台の別子鉱業所長社宅、住友化学幹部社宅、共電幹部社宅、外

国人社宅などであり、社宅の景観をよく表している。

ただし、西側高台の池の東側一帯には、昭和4年から6年にかけて建築された一棟二戸建ての社宅が並んでおり、当初は1戸建て住宅にこだわっていなかったことがわかる。これが、変化するのが昭和10年の社宅規程の改正であり、鉱山の住友山田社宅は建坪が一等職員で45坪以上、・二等職員で25坪～50坪以上と大幅に緩和され、以後、幹部住宅地として変貌していった。昭和12年の別子鉱業所長社宅の建坪102坪がその典型である。化学も昭和10年から幹部社宅を多数建築し、電力、機械も同時期にこれに続いた。

③公館・社交の役割を果たした幹部社宅

現存する別子鉱業所長社宅、住友化学幹部社宅、共電幹部社宅は洋間の応接室を持ち、建家は大きくパブリック空間とプライベート空間のゾーンに分かれる。パブリック空間には洋間の応接室と、これに続く床の間付きの座敷がある。プライベートゾーンには内玄関があり、居間・座敷のほか台所・女中室などのバックヤードがあった。会社を代表する役職者として公的な相談やもてなしを社宅で行う機会もあり、社宅は公館の役割を果たしたと言えよう。

洋間付きの鉱山幹部社宅は、昭和4年（1929）1棟（6号社宅）、同5年に1棟（1号社宅）、同12年に2棟（6号別子鉱業所長社宅、61号社宅）建てられた。次いで、昭和10年に電力幹部社宅と住友化学幹部社宅が建った。昭和10年の幹部社宅は、本格的な洋室で大理石の電気ヒーター式暖炉がついていた。昭和12年建築の別子鉱業所長社宅はこれらを参考にして、外国人合宿の横に、敷地426坪、建坪102坪におよぶ大邸宅を建て、建家はそれぞれ独立した応接室棟、主屋、離れ（茶室）から構成されていた。幹部社宅の最終形とみることができる。なお、これら幹部社宅は、公館としての役割のほか、社員の新年宴会、新入社員の茶話会など交流の場としても使用された。

④昭和の御雇い外国人社宅

明治政府が雇った御雇い外国人の官舎は、旧官営鉱山の阿仁・生野鉱山などに見られるが、それに続く民間会社の外国人社宅の事例は少ない。住友山田社宅には昭和の外国人社宅がそのまま現存しており、きわめて貴重である。昭和時代は戦前の軍需、戦後の経済復興に外国技術の導入が不可欠であり、明治初期の御雇外国人に匹敵すると考えている。戦前では、機械がクレーン技術者ガーレップを、化学が元ＮＥＣ社副社長ホープを招聘し、外国人社宅ないし外国人合宿を住居とした。

⑤大規模に残る社宅の区画

住友山田社宅は、昭和4年（1929）の建築から平成30年（2018）の現在まで約90年を経過し、戦後の建家でも70年を超えている。その老朽化と耐震性の問題は、平成7年（1995）の阪神大震災によって喫緊の課題となり、建築基準法の改正とともに順次取り壊され、最終的には6戸となったが、区画はそのまま残っている。これほどの区画が、手つかずのまま残されていることは重要である。

平成25年、住友金属鉱山㈱は旧星越駅前に社宅の区画を残して2棟のＲＣ造5階建ての集合住宅を建てた。現在、日本国中で昔の一般住宅が、一軒家からマンションなどに変貌しているが、社宅もまた会社が生き続ける限り建て替えられ、生き続けるものである。住友山田社宅が区画を残しながら、新たな集合住宅などの社宅として生き続けることを期待する。

昭和48年3月、別子銅山は約300年にわたる長い歴史を閉じた。しかし、新居浜は昭和初期の都市計画によって鉱山町から工業都市へと飛躍できた。都市の発展経緯が、今日の工場群や港湾・道路・社宅などの社会資本として生き続け、新居浜は生きた産業遺産都市となっている。産業の発達とともに、これからも社宅は作り続けられることであろう。かつて、鷲尾の都市計画と理念に感銘を受けた白石町長（後の初代市長）は、「この躍進工都の観覧者ではなく、演出者の一員たるべし」と市民に訴えた。先人の遺産を生かしながら、このエリアを拠点とした包括的な新たなまちづくりが求められている。

表１－１０　現存する全国の社宅（2009年現在）

No.	会社名	建設年代	所在地	概要
1	日本郵船	明治末	小樽市	手宮住宅（支店長宅１棟、社宅３棟６戸）
2	函館どつく	1943	室蘭市	築地社宅（職員12棟19戸）
3	日本製鋼所	1909	室蘭市	茶津社宅（職員44棟94戸）
4	縣是製糸会社	1930	岩手県高田市	高田工場社宅（2棟）
5	三菱鉱業細倉鉱業所	1934～	宮城県栗原市	佐野社宅（職員40棟）
6	古河鉱業阿仁鉱業所	1882	秋田県北秋田市	外国人官舎（重文）
7	藤田組小坂鉱山	1882	秋田県鹿角郡小坂町	康楽館（劇場、重文）
8	常磐炭砿	1913	福島県いわき市	竹ノ内職員住宅（役員社宅17棟64戸ほか）、宮沢鉱員社宅（鉱夫長屋38棟762戸ほか）
9	久原鉱業日立鉱山	明治末～	茨城県日立市	共楽館（劇場、登録有形）
10	日立製作所日立工場	1936～57	茨城県日立市	会瀬社宅77戸
11	日立製作所多賀工場	1939～45	茨城県日立市	桜川社宅、一部現存
12	日立製作所多賀工場	1939～45	茨城県日立市	大甕社宅、大甕倶楽部・ゴルフ場
13	谷口製糸場	～1941	茨城県桜川市	女工宿舎2棟
14	古河鉱業足尾鉱山	1911	栃木県日光市	掛水社宅（重役14棟21戸）、掛水倶楽部、愛宕下社宅（鉱夫30棟）ほか
15	新町屑糸紡績所	昭和初期	群馬県高崎市	女工寄宿舎
16	森秀織物	1924頃	群馬県桐生市	寄宿舎2棟
17	北側織物工場	1916頃	群馬県桐生市	女工宿舎・煉瓦塀（登録有形）
18	富岡製糸場	1872～	群馬県富岡市	ブリュナ館･旧女工館・構内社宅11棟（国宝）ほか
19	日本煉瓦製造	1888頃	埼玉県深谷市	事務所（重文）
20	N.Y.ﾅｼｮﾅﾙﾊﾞﾝｸ銀行	1931	東京都千代田区	社宅（ヴォーリズ設計）
21	岡谷製糸会社	明治	長野県岡谷市	片倉館（1928年）
22	近江兄弟社	1918～	滋賀県近江八幡市	旧吉田・ハンター邸（1931年）、ダブルハウス（1921年）
23	郡是製糸綾部工場	1922～	京都府綾部市	西社宅（職員・工員）
24	N.Y.ﾅｼｮﾅﾙﾊﾞﾝｸ銀行		兵庫県西宮市	社宅（ヴォーリズ設計）
25	三菱鉱業生野鉱山	1876～	兵庫県朝来市	甲社宅（旧官舎・旧判任官・等外官舎等6棟）、寺ノ上社宅、奥社宅、神宮寺社宅ほか
26	日本製鉄広畑製鉄所	1939～45	兵庫県姫路市	京見会館
27	三菱重工水島航空機製作所	1944	岡山県倉敷市	社宅4823戸
28	倉敷紡績		岡山県倉敷市	倉敷工場・倉敷中央病院
29	尾崎商事本社		岡山県倉敷市	寄宿舎
30	山本鉄工所	1934～38	広島県庄原市	寄宿舎・第二寄宿舎
31	小野田セメント	1911～	山口県山陽小野田市	小野田倶楽部（1914年）
32	日本金属彦島製錬所	1916・23	山口県下関市	向陽寮（1916年）、済美寮（1923年）
33	東洋高圧工業彦島工業所	1940～	山口県下関市	池の上住宅、東用作住宅、彦修館、速磯住宅、ひびき荘
34	鐘淵紡績防府工場	1397	山口県防府市	鐘和寮（倶楽部）
35	三菱鉱業直島製錬所	1917～	香川県香川郡直島町	才の神社宅（1930年頃、係長・職工・職工寮）、鷲の松社宅（1936年頃～、職員・職員寮・倶楽部）
36	住友別子鉱山・住友化学・住友共同電力	1927～45	愛媛県新居浜市	住友山田社宅（職員約250戸、ゴルフ場、住友倶楽部、星越駅舎）
37	三井物産	明治末～	福岡県北九州市	旧三井物産住宅、旧門司三井倶楽部（重文）
38	日本製鉄八幡製鉄所	1901～	福岡県北九州市	高見倶楽部
39	富士紡績大分工場	1913～	大分県大分市	寄宿舎、旧診療所、工場事務所（1912年）
40	三菱鉱業高島炭鉱端島坑（軍艦島）	1890～	長崎県長崎市	職員住宅95戸（1931年、ＲＣ造５階建て）、19～20号棟（1918年、ＲＣ造９階・6階建て）ほか
41	鐘淵紡績熊本支店（旧熊本紡績）	1893～	熊本県熊本市	診療所（登録有形）
42	日本セメント八代工場		熊本県八代市	前川社宅、松高社宅（職員・工員）、新地社宅（係長）、大築島社宅（親方・鉱夫）
43	九州製紙八代工場（旧東肥製紙）	1898	熊本県八代市	倶楽部（1925年）
44	日本窒素肥料水俣工場	1908	熊本県八代市	倶楽部
45	三菱鉱業槇峰鉱山	1889買収	宮崎県延岡市	協和会館
46	島津家鉱業館（山ヶ野）	1907操業	鹿児島県霧島市・さつま町	職員社宅（1914年）
47	島津家鉱業館（芹ヶ野）	1909操業	鹿児島県いちき串木野市	職員社宅（1911年）
48	三井鉱山串木野鉱業所	1914	鹿児島県いちき串木野市	五反田会館
49	大日本精糖（旧東洋製糖）大東製糖所	1916	沖縄県島尻郡南大東村	南大東社宅（職員・工員）
50	大日本精糖（旧東洋製糖）北大東出張所	1919～	沖縄県島尻郡北大東村	北大東社宅（職員・工員）

出典：社宅研究会編『社宅街　企業が育んだ住宅地』（学芸出版社　2009年）